

41820

教科書文庫

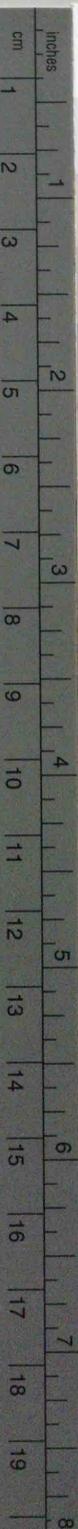
4
810
41-1930
20000 67112

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



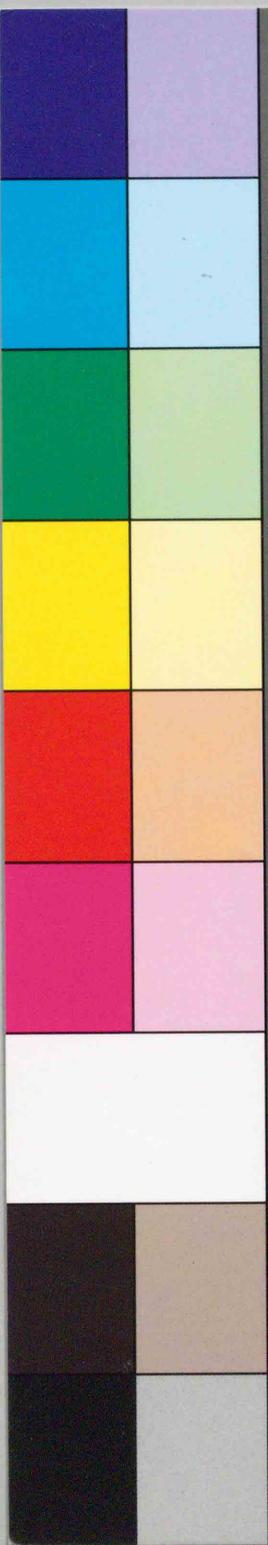
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
BB5

國

文

選

資料室

日八十二月一十年五和昭

濟定檢省部文

用科語國校學中

國
文
選



東京高等師範學校教授
垣内松三編

42
810
BB5

- 一 縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一 文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。
- 一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。
- 一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

目次

二〇五字
二〇

一	槌の響	夏目漱石	四
二	燈火	佐佐木信綱	七
三	父の思ひ出	里見 淳	二〇
四	先生への通信	吉村冬彦	三
五	小諸なる古城のほとり	島崎藤村	六
六	松下村塾を訪ふ	下村海南	六
七	繪馬の名畫	饗庭篁村	五
八	川柳點	金子元臣	五
九	障子の國	鶴見祐輔	五
一〇	鎮守の森	笹川臨風	五

一一	四季の雨	松平定信	七
一二	椿落ちて(句評)	萩原井泉水	七
一三	露の世	小林一茶	八
一四	雪前雪後	幸田露伴	七
一五	樹の根	和辻哲郎	七
一六	日蓮上人	高山樗牛	一〇三
一七	神國	徳富猪一郎	一九
一八	誠の説	三浦梅園	二八
一九	杜子春	芥川龍之介	三三
二〇	角笛の響	吉江喬松	五
二一	亡兆	菊池 寛	七
二二	勅語		一八

一 槌の響

ぶらりと両手を下げたまゝ、圭さんがごここからか歸つて来る。

「何處へ行つたね。」

「一寸、町を歩いて来た。」

「何か見るものがあるかい。」

「寺が一軒あつた。」

「それから。」

「銀杏の樹が一本、門前にあつた。」

「それから。」

「銀杏の樹から本堂まで、一町半ばかり石が敷詰めてあつ

「ぶらりと両手を下げたまゝ。」

た。非常に細長い寺だつた。」

「はひつて見たかい。」

「やめて来た。」

「其の外に何もないかね。」

「別段何もない。一體寺と云ふものは大概の村にはあるね、君。」

「さうさ、人間の死ぬ處には必ずある筈ぢやないか。」

「成程さうだね。」と圭さんは首を捻る。圭さんは時々妙な事に感心する。

暫くして捻つた首を真直ぐにして、圭さんがかう云つた。

「それから鍛冶屋の前で、馬の蹄鐵を換へるところを見て来たが、實に巧なものだね。」

「成程さうだね。」

鍛冶―かち。

「どうも、寺だけにしては、ちと時間が長過ぎると思つた。馬の蹄鐵がそんなに珍らしいかい。」
「珍らしくなくつても見たのさ。君、あれに使ふ道具が幾通りあると思ふ。」

「幾通りあるかな。」

「あてて見給へ。」

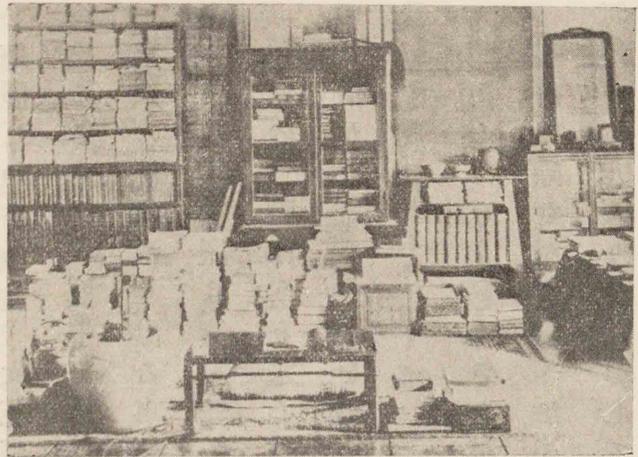
「あてなくつても好いから、教へるさ。」

「何でも、七つばかりある。」

「そんなにあるかい。何と何だ。」

「何と何だつて、確にあるんだよ。第一、古い蹄鐵をはがす鑿と、鑿を叩く槌と、それから爪を削る小刀と、爪を刳る妙なもの、それから……。」

「あてて見給へ」



夏目漱石の書齋

「それから何かあるかい。」

「それから變なものが、まだ色々あるんだよ。第一、馬の大人しいには驚いた。あんなに削られても、刳られても平気で居るぜ。」

「爪だもの。人間だつて、平気で爪を剪るぢやないか。」

「人間はさうだが、馬だぜ、君。」

「馬だつて人間だつて、爪に變りはないやね。君は餘程暢

「馬だぜ、君」

「氣だよ。」

「暢氣だから見てゐたのさ。然し薄暗い處で赤い鐵を打つと綺麗だね。ぴち／＼火花が出る。」

「出るさ。東京の眞中でも出る。」

「東京の眞中でも、出る事は出るが、感じが違ふよ。かう云ふ山の中の鍛冶屋は、第一音から違ふ。そら此處まで聞えるぜ。」
初秋の日脚は、うそ寒く遠い國の方へ傾いて、淋しい山里の空氣が心細い夕暮を促すなかに、かあん／＼と鐵を打つ音がする。

「聞えるだらう。」と圭さんが云ふ。

「うん。」と碌さんは答へた。ざり、默然として居る。隣の部屋で何だか二人頻りに話をしてゐる。

「そこで、その相手が竹刀を落したんだあね。すると、そのち

「心細い夕暮を促すなかに」

よいと小手を取つたんだあね。」

「ふうん、ごう／＼小手を取られたのかい。」

「ごう／＼小手を取られたんだあね。ちよいと小手を取つたんだが、そこがそら竹刀を落したものだから、ごうにもかうにも仕様がないやあね。」

「ふうん、竹刀を落したのかい。」

「竹刀はそら、さつき落してしまつたあね。」

「竹刀を落してしまつて、小手を取られたら困るだらう。」

「困らあね、竹刀も小手も取られたんだから。」

二人の話は、どこまで行つても竹刀と小手で持切つて居る。默然として對坐してゐた圭さんと碌さんは、顔を見合はしてにやりと笑つた。

「顔を見合はしてにやりと笑つた」

「癩走つた上に何だか心細い」

かあん／＼と鐵を打つ音が、靜かな村に響き渡る。癩走つた上に何だか心細い。
「まだ蹄鐵を打つてゐる。何だか寒いね、君。」と、圭さんは白い浴衣の下で堅くなる。碌さんも同じく白地の單衣の襟を搔合はせて、だらしない膝頭を行儀よく揃へる。やがて圭さんが云ふ。

「僕の子供の時住んでゐた町の真中に、一軒豆腐屋があつてね。」

「豆腐屋があつて？」

「豆腐屋があつて、其の豆腐屋の角から一町ばかり爪先上りに上がるよ、寒磬寺といふ御寺があつてね。」

「寒磬寺といふ御寺がある？」

「ある。今でもあるだらう。門前から見ると、只大竹藪ばかり見えて、本堂も庫裏もないやうだ。其の御寺で毎朝四時頃になると、誰だか鉦を叩く。」

「誰だか鉦を叩くつて、坊さんが叩くんだらう。」

「坊さんだか何だか分らない。只竹藪の中でかん／＼と幽かに叩くのさ。冬の朝なんぞ霜が強くおりて、布團の中で世の中の寒さを一二寸の厚さに遮つて聞いてゐると、竹藪の中から、かん／＼響いてくる。誰が叩くのだか分らない。僕は寺の前を通る度に、長い敷石と倒れかゝつた山門と、山門を埋め盡くすほどの大竹藪を見るのだが、一度も山門の中を覗いた事がない。只竹藪の中で叩く鉦の音だけを聞いては、夜具の中で海老のやうになるのさ。」

「誰だか鉦を叩く」

「海老のやうになるつて？」

「うん、海老のやうになつて、口のうちでかんくかんくと云ふのさ。」

「妙だね。」

「すると、門前の豆腐屋が屹度起きて、雨戸を明ける。ぎつぎつと豆を臼で挽く音がする。ざあくと豆腐の水を換へる音がする。」

「君の家は全體どこにある譯だね。」

「僕のうちは、——つまり、そんな音が聞える處にあるのさ。」

「だから、何處にある譯だね。」

「すぐ傍さ。」

「豆腐屋の向かい、隣かい。」

「つまり、そんな音が聞える處にあるのさ。」

「なに二階さ。」

「どこ。」

「豆腐屋の二階さ。」

「へえ、そいつは……。」と、碌さんは驚いた。

「僕は豆腐屋の子だよ。」

「へえ、豆腐屋かい。」と、碌さんは再び驚いた。

「それから、垣根の朝顔が茶色に枯れて、引つ張るこがらがら鳴る時分、白い霧が一面におりて、町の外れの瓦斯燈に灯がちらく／＼すると思ふと、又鉦が鳴る。かんく／＼竹藪の奥で、研えて鳴る。それから門前の豆腐屋が、此の鉦を合圖に腰障子をはめる。」

「門前の豆腐屋といふが、それが君の家ぢやないか。」

「なに二階さ。」

「僕の家、即ち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かんくこいふ音を聞きながら、僕は二階へあがつて布團を敷いて寝る。僕の家、油揚は旨かつた。近處で評判だつた。」

隣座敷の小手と竹刀は雙方とも大人しくなつて、向の縁側では、六十餘りの肥つた爺さんが、丸い脊を柱にもたせて、胡坐のまゝ、毛抜で鬚の鬚を一本々々抜いてゐる。鬚の根をうんと抑へて、ぐいと抜くと、毛抜は下へ弾ねかへり、鬚は上へ反りかへる。丸で器械のやうに見える。

「あれは何日掛つたら抜けるだらう。」と、碌さんが圭さんに質問をかける。

「一所懸命にやつたら、半日位で済むだらう。」

「さうは行くまい。」と、碌さんが反對する。

「僕の家、即ち門前の」

「さうかな。一日かな。」

「一日や二日で綺麗に抜けるならわけはない。」

「さうさ、ここによると一週間も掛るかね。見給へ、あの丁寧な鬚を撫廻しながら抜いてゐるのを。」

「あれぢや、古いのを抜いてしまはないうちに、新しいのが生えるかも知れないね。」

「兎に角痛い事だらう。」と、圭さんは話頭を轉じた。

「痛いに違ないね。忠告してやらうか。」

「なんて。」

「よせつてさ。」

「餘計な事だ。それより幾日掛つたらみんな抜けるか、聞いて見ようぢやないか。」

「兎に角痛い事だらう」

「うん、よからう。君が聞くんだよ。」

「僕はいやだ。君が聞くのさ。」

「聞いても好いが、詰らないぢやないか。」

「だから、まあ、よさうよ。」と、圭さんは自己の申出を惜氣もなく撤回した。

一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を幾重の稻妻に碎く積りか、かあんくくと澄切つた空の底に響き渡る。
〔夏目漱石「漱石全集」〕

初秋や草のいほりの竹火箸

初秋や枕に頤をのせて見る

初秋の心おちつく端居かな

青々
月斗
別天樓

「今日山里に立つ秋を幾重の稻妻に碎く積りか」

青々 俳人。名は松瀬彌三郎。明治二年大阪市に生まる。
月斗 俳人。名は青木新護。明治十二年大阪市に生まる。
別天樓 俳人。名は野田要吉。明治二年岡山縣に生まる。

二 燈 火

時は夏の半ば、いやとこそせと長閑やかに唄ひ連れゆく御伊勢参りの群も、春先ほごには騒がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に、御免。といつて腰をかけたのは、本居舜庵といふ、魚町の年若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名は宣長といつて、皇國學の書やら、漢籍やらを常に買ふ、この店の常華客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を拍つて、あゝ残念なことをしなされた。あなたがよく名前を云つておいでになる江戸の岡部先生が、今の先、若いお弟子と供を連れてお立寄りになつたに。といふ。舜庵は、いつものゆつくりした調子

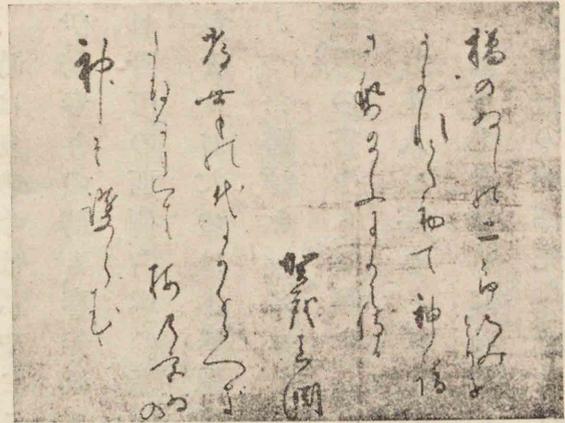
「時は夏の半ば」

松坂 三重縣飯南郡の町。

本居舜庵 宣長のこと。伊勢に生まる。賀茂眞淵の門に入り國學四大人の一人と稱せらる。享和元（二四六一）年歿す。年七十二。

岡部先生 賀茂眞淵。通稱は岡部衛士。荷田春滿に従つて學ぶ。國學四大人の一人。明和六（二四二九）年歿す。年七十三。

とは違つて、先生がどうして此處へ。と、あわたゞしく問ふ。



賀茂眞淵筆蹟

主人は、何でも、田安様の御用で、山城から大和とお廻りになつて歸途に参宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつた所、少しお足に浮腫が出たこやらで御逗留今朝はもうお宜しいので、御出立の途中、何か古い本は無いか、暫くお休みになつて、参宮にお出かけになりました。舜庵、それは残念なこゝである。どうかしてお目に懸りたいが、迹を追うてお出でなされませ。追附

「あわたゞしく問ふ」

田安様 田安宗武。吉宗の第二子。眞淵に従つて學ぶ。明和八(二四三二)年薨す。年五十七。
橋のぬしの二郎のみどり子うまれて初めて神詣させ給ふによみ侍る 賀茂眞淵
常世もの代にかゝるべきたねなれば梅の宮居の神ぞ護らむ 浮腫

けませう。と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聴取つて、迹を追うた。

迹を追うて松坂の市街を離れ、次の宿なる垣鼻村の先まで行つたが、どうもそれらしい人に追附き得なかつたので、すこゝこわが家に戻つて來た。

數日の後、岡部衛士は神宮の参拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松坂の本陣新上屋に宿つた。若し歸途に又泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。と頼んで置いた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るものも取敢へず、旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室にくつろいでゐた。衛士は仄暗い行燈の下に於て舜庵を

垣鼻村 飯南村の大字。松坂の南に接す。

二見が浦 度會郡二見村の海岸。

鳥羽 志摩郡の町。日和見山は町の西北にある小丘。

「どうか知らせて貰ひたい」

村田春郷 歌人。江戸の人。眞淵に従ひて學ぶ。明和五(二四二八)年歿す。年三十。
村田春海 國學者。春郷の弟。眞淵の門に入り秀才の名高し。文化八

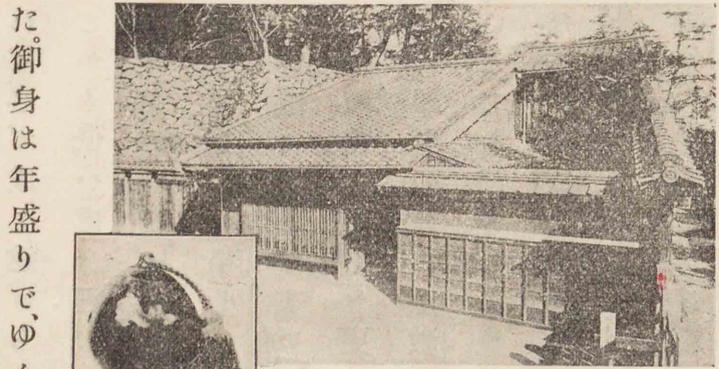
引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衛士は當年六十七歳、その大著なる冠辭考、萬葉考なども既に成り、將軍有徳公の第二子田中納言宗武卿の國學の師として、その名噴々たる一世の老大家である。年老いたれど頼ゆたかな此の老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年、而も彼は二十三歳の時、京都に遊學して醫術を學び、二十八歳にして松坂に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つ

〔二四七一〕年歿す。年六十六。
 「仄暗い行燈の下」

冠辭考 十卷。冠辭をあらためて、五十音順に配列註釋したるもの。
 萬葉考 六卷。萬葉集考のこと。萬葉集の註釋書。
 有徳公 徳川吉宗をいふ。
 「眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性格に包んで」

契沖 大阪の僧。國學者として名あり。元祿十四(二三六一)年歿す。年六十二。
 古事記 三卷。神代より推古天皇の朝までの事



本居宣長の舊宅と遺愛の鈴



た。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。われも固より神典を解きあきらめんこの志であつたが、それにはまづ漢意を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故自分は専ら萬葉を明らめて居た間にかくも年老いて、殘の齡はいくばくも無くなつてしまつた。御身は年盛りで、ゆくさきが長いから、怠らず勉めさへす

を記したる、最古の歴史。元明天皇の朝に、太安麿の記したるもの。
 「若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた」

萬葉 萬葉集。二十卷。仁徳天皇より奈良朝までの長短歌を蒐む。大伴家持の選と傳へらる。
 齡—よはひ。

れば、必ず成し遂げられるであらう。併し世の學に志す者は、
さかく低い處を經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊
がある。かくては低い處をさへ得ることが出來ぬのである。
此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低い處をよく固めて、さて
高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆閉され果てた深夜
に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道の
いづこを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側
なるわが家の潜戸をはひつた。隣家なる桶利の主人は律儀
者で、いつも遅くまで夜なべをして居る。今夜もこん／＼と
桶の箍かを入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、
今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

「低い處を經ないで、す
ぐに高い處へ登らうと
する弊」

「老學者の言に感激して
面ほてりした若人」

舜庵はその後江戸に便を求め、その翌年の正月、村田傳藏
が中にはひつて、名簿を捧げ、うけひごうけひごをしるして、縣居の
門人録に名を列ねる一人となつた。爾來松坂と江戸との間、
飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。門人とは云へ、その相會
うたことは僅に一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのであ
る。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊
勢國飯南郡松坂中町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つ
た老學者と若人とを照らした。而もその仄暗い燈火は、わが
國文學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。

(佐佐木信綱の文による)

村田傳藏 眞淵の門人。
坂大學の通稱。

うけひご
縣居 アガタキ。眞淵の
家の號。

「飛脚の往來に、彼は問
ひ、此は答へた」

寶曆十三年 後櫻町天皇
の御宇。二四二三年。

「國文學史の上に不滅の
光を放つ」
佐佐木信綱 文學博士。
明治五年三重縣に生ま
る。東京帝國大學古典科
の出身。東京帝國大學文
學部講師。

三 父の思ひ出

父の外貌で、一番はつきり残つてゐるのは手だ。非常に小さく、指が太短くて、先から數へると第三の關節の梅干皺が深くて美しく可愛らしかつた。老年のこゝこゝで、摘めば勿論山脈のやうな一本の皺にたくし上げるこゝこの出来るものだつたが。

家では、いつでも必ず四つ折の手拭を膝にかけてゐたが、その上に、一寸でも汚すことが惜しいやうに、鶉の卵ほどのものを掌の中に入れてゐるかと思はれるくらゐの中高にして、行儀よく指先を揃へて、この皺くちやな小さな手を置いてゐた。そして、好きな謠を唄ふ時になると、右の指先全體

「父の外貌で、一番はつきり残つてゐるのは」

鶉—うづら

が、謠本の中についてゐる種々な符牒を描いては、うねく〜と膝の上で動くのであつた。一體に元氣な人だつたけれど、年も年は争はれないもので、爪には縦にしぼが走つてゐた。

ごく晩年の五六年はさうでもなかつたが、私が覺えてから、晩年までの父は、ひどく忙しさうで、めつたに家にはゐなかつた。朝我々が起きる時分には、冬だ、頭がほんの少しばかり見えるか見えないほどに、すつほりと夜具をかぶつてしまつて、ぐうぐうとかなり大きな鼾をかいて寐てゐた。我は學校へ行つてしまふ。そして、夜になつても父が我々の寐る前に歸つて來ることは稀だつたから、三日も四日も、その頭の先だけしか見ないで過すことが多かつた。たまに家

描く—ゑがく

しぼ

「私が覺えてから、晩年までの父は」

にゐると、客の絶間がなかつた。絶間があると、小さな手帳に、短くなつた赤鉛筆で、くしやくしやくに何やら書いてゐた。

そんなわけで、私はまるで側へよつて、甘えたり、一緒に遊んだりした覺がない。たつた一度、六つか七つの頃、夏鎌倉の別荘の庭で、兄弟たちが寄集つて角力をこつてゐた時、何と
思つたのか、父が禪一つになつて跳びだして来て、「さあ来い。」と構へたことがあつた。

年の順にだんく、轉がされて、やがて私の番が来て、一所懸命に跳びかゝつた時の嬉しさを、今もつて忘れない。あんまり嬉しいと涙が出るものだといふ經驗は、その時初めて知つた。

「たつた一度」

「年の順にだんく」

驚いたの何のと言つて、これはとても叶はないと、ぶるぶる怖氣を震つたのは、どんな悪戯をした報いか知らないが、

兄の一人が、縁側に引きずり出されると、いきなり二三間先の庭土の上へ、うんといふほど叩きつけられた時だつた。

幸ひ私はそんな目には逢はなかつたが、或時かういふことがあつた。何でも夜父が歸つて来て、私を呼出して、「こここの縁側に何かあるから見て来い」といはれた。言葉の調子で、穩かでないことは知つたが、早速行つて見たけれども何もない。戻つてさう返事をするに、「もう一度よく見て来い。」と
唝鳴りつけられた。三度目四度目の時に、まだ分らんのかと一喝して立上がるに、すぐぐんぐん私を引張つて行つて、そこの縁側へ私の額をこすりつけるやうに押付けた。そこ

怖氣—おぢけ

「かういふことがあつた」

には、二三日前に私が半紙に赤インキか何かで日の丸を描いたのが、滲抜けて、ちやんと型がついて残つてゐた。勿論一も二もなく降参してしまつたが、後になつて、何かあるから見て來い。」とは少し意地が悪いと思つた。

併し、今となつては、それも懐かしく、こんなやうな記憶でもいゝから、もつこく澤山欲しいものだと思はれる。

或夏のころ、父は輕井澤へ避暑中に、澤山の書を書いて、持つて歸つた。もう私は別に家を構へてゐた時で、或晩、何かの集りで父の家へ行くに、親類が大勢よつてゐる席上に、父の書いて來た紙や唐紙が並べられて、めいめい一枚づつ分けて貰ふことになつた。私は、水自竹邊流來清が字の出來はい

インキ 洋墨汁。Ink

意地。いぢ。

「今となつては、それも懐かしく」

輕井澤 長野縣北佐久郡の町。

紙

いと思つたが、大故不器も身の丈五尺一寸しかない私の書齋に懸けるには、ふさはしくて面白からうなごご迷ひながら眺めてゐるに、父が側に來て、一枚別にのけてくれて、

「お前はこれにせい。」

「爾唯弗矜……ですか。」

それから先を私が読み悩んでゐるに、

「爾唯弗矜天下莫與汝爭功、爾唯不伐天下莫與汝爭能。」と、

側の兄が讀んでくれた。

「いや、これは大變だ。結構ですけれど、これはどうも語がちつと……これは懸けられない。これは困るなあ。」

私はすつかり恐縮してしまつて、わけもなく赤面しながら呟いた。すると、

「迷ひながら眺めてゐると」

「なに、困ることがあるものか。」

相變らず、叱りどばすやうな父の言葉だつた。この時にも、私は涙がこぼれかゝつた。

その後、私はこの言葉に、或時は叱られ、或時は勵まされ、或時は冷かされ、或時は微笑まされ、或時は鞭打たれ、また或時は他愛もなくおだてられて來たものだ。(里見 弴の文による)

打つも撫でるも親の慈悲

親は無くとも子は育つ

親の持たせる子の心

親に似ぬ子は鬼子

親の心子知らず

親の光は七光 (俚諺)

「相變らず、叱りとばすやうな」

里見 弴 小説家。本名は山内英夫。明治二十一年横濱市に生まる。學習院高等科の出身。

四 先生への通信

ヴェニスから

お寺の鳩に豆を買つて遣るのは、日本に限ることと思つて居ましたが、此處のサンマルコのお寺の前でも、同じことをやつて居ます。但し豆ではなくて、玉蜀黍を細長い圓錐形の紙袋につめたのを賣つて居ます。大道で鍋を煮立たせて、茹章魚を賣つて居る男が居まし



院寺コルマンサ

ヴェニス 伊太利北部、アドリヤ海に臨む港。Venice.

サンマルコ 西紀八三〇年に創建せらる。St. Mark.

玉蜀黍——たうもろこし
「圓錐形の紙袋」

た。

ローマから

ローマへ来て累々たる廢墟の間を彷徨して居ます。今日は市街を離れて、アルバノの湖からロツカーデーパ、の方へ古い火山の跡を見に参りました。到る處の山腹にはオリウの實が熟して、其の下には羊の群が遊んで居ます。山路で、大原女のように、頭の上へ枯枝と蝙蝠傘を一緒に束ねたのを載せて、靴下を編みながら歩いて來る女に會ひました。角の長い牛に材木車を牽かせて來るのもあれば、驢馬に炭俵を積んで來るのもありました。蜜柑の木もあれば、竹もあります。眼と髪、黒い女が水溜りのまはりに集つて洗濯をして居る傍には、鶏が群れ遊び、豚が路傍で鳴いて居ます。ワチ

ローマ イタリアの首府。Rome.

アルバノの湖 ローマの東南約二十軒にある湖。Albano.

ロツカーデーパ、アルバノ湖の東方約一軒。Rocca di Papa.

「到る處の山腹には」

オリウ 橄欖樹。

Olive.

大原女 京都市北郊大原村邊の婦人の風俗。

ワチカン ローマ法皇の宮殿。ローマ市にあり。Vatican.



(ローマの郊外)

廢墟の間

カンの宮殿も一部見ましたが、此處の名物は旨い物ばかりの様です。

伯林から

今度の旅行中は天氣の悪い日が多くて、殊に瑞西では雨や霧の爲にアルプスの雪も見えず、割合に詰りませんでした。それでもモンブランの氷河を見に行つた日は天氣が好くて面白うございました。寒暖計一本提げて、氣温を測つたりして歩きました。鶴嘴の様な杖をさげて、繩を肩に擔いだ案内者が、英語で案内者は入らぬか云ふから、お前は英語を話すのか。と訊く。こい、え。と云ひました。迂らない用心に靴の上に靴下を穿いて、一人で氷河を渡りました。それはそれは好い心持でした。氷河の向側は峻しい急な路で、高山植

モンブラン アルプス山脈中の最高峰。佛伊兩國の境にあり。海拔四八一〇米。 Mont Blanc.
「氣温を測つたりして」

物が岩の間に花を綴り、處々に瀧がありました。此處から谷へおりの途中、小さな飲食店の前を通つたら、後から一人追つかけて来て、お前は日本人ではないか。と訊きますから、然うだ。と答へたら、私は英吉利人だが、日本には八年間も居て、あらゆる高山へ登り、富士へは六回登つたことがある。と話しました。

其處から谷底へおりて、シャモニの町まで歩きましたが、道端の牧場には、頸に鈴をつけた牛が放し飼にしてあつて、其の鈴の音が非常に音樂的に聞えました。又番人の子供や婆さんも本當に繪のやうで、愉快でした。日本にもあるやうな秋草が咲いて居り、踏切番の小屋には菊が咲いて居ました。路傍のマリヤの御堂に花が供へてあるのを見ました。シ

綴る——つゞる

シャモニ 佛蘭西の東隅。モンブラン山麓。Chamonix.

「日本にもあるやうな秋草」

マリヤ キリストの母。聖母。Maria.

ヤモニの町へはひる頃には、もう日が暮れかゝつて、眞紅な夕陽がブゾンの氷河の頂を染めた時は、實に綺麗でした。町の通には、名物の瑪瑙細工や、牛の角細工を並べた店ばかり連なつて、かういふ處にはお極りの活動寫眞が自動ピアノで客を呼んで居ました。

ジュネーブからベルン・チューリヒ・ルツェルンなど見て廻りました。ルツェルンには戦争と平和の博物館といふのがあつて、日露戦争の部には俗悪な錦繪が澤山陳列してあつたので、少し厭に成りました。到る處の谷や傾斜地には牧場があり、林檎が實つて、美しい國だと思ひました。

(吉村冬彦「戴柑子集」)

ブゾン モンブランの山中にあり。Boissons.

ピアノ 洋琴。Piano.

ジュネーブ スイス南隅の都會。Geneve.
ベルン スイス共和国の首府。Bern.
チューリヒ スイス東北部の工業地。Zurich.
ルツェルン スイス中部の都會。Luzern.

吉村冬彦 理學博士。本名は寺田寅彦。明治十一年東京市に生まる。東京帝國大學物理科の出身。現に同大學教授たり。夏目漱石に従つて、文學的指導を受けたり。

五 小諸なる古城のほとり

椰子の寢具

小諸なる古城のほとり 名もしうぬ遠き島より
雲白く遊子悲しむ 流れよる椰子の寢具のほとり

緑なす藁蓐は萌えず みるさとの山岸をはなれて

若草も藉くによしなし 故郷も波に後月

しるがねの衾の岡邊 ぬれも又渚を枕

日に溶けて淡雪流る ひとりみの浮寝の旅ぞ

あたゝかき光はあれど 寝具をとりて胸にあふれば

野に満つる香も知らず あらたなり流離の憂

浅くのみ春は霞みて 海の日の沈むをみれば

たちり若つ異郷の涙

小諸 コモロ。長野縣北
佐久郡の町。
遊子

麥の色わづかに青し、 鬼のやる八重の汐々
旅人の群はいくつか づづれの日にか國にかへらん
畠中の道を急ぎぬ。

暮れ行けば淺間も見えず

歌哀し佐久の草笛、

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりて、

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む。(島崎藤村「藤村詩集」)

淺間 小諸の北方、群馬
縣界にある活火山。海
抜二五四二米。
佐久 長野縣南・北佐久
郡。佐久平の地。
千曲川、佐久平を北流し
て、長野市の南にて信
濃川に入る。
いざよふ

草枕

六 松下村塾を訪ふ

阿武川の中洲になつてゐる萩の街、そこに久坂玄瑞、高杉晋作、木戸孝允、山縣有朋などの舊宅が點在してゐる。

東萩に渡れば、東の方毛利家累代の菩提處、四大夫十二烈士の墓處とある東光寺を背にして、松陰神社、松下村塾、松陰幽居の家などが一郭をなしてゐる。

社前には、松陰先生の臺柄と稱せられる米つき臺が保存せられてゐる。安政五年六月二十八日、先生村塾から在京の久坂玄瑞に贈つた書中に、

隔日左傳八家會讀。勿論塾中常居。七つ過會讀終る。それより畑又は米舂、與在塾生同之。米舂大得其妙、大抵兩三

人同じく上り、會讀しながら舂之。史記など二十四五葉讀む間に、米精げをはる。また一快なり。

とある。松陰先生は二十二歳で安積良齋、佐久間象山に従うて學び、ついで安政元年二十五歳の時伊豆下田に於て米艦に搭乗を計り、事破れて江戸の獄に下り、ついで萩の野山獄にうつされ、後免されて杉家に幽せられた。幽囚中、家學山鹿流兵學教授のため門人の引見を許され、松下村塾を開いた。兵學研究に名を借りて來つて學ぶ者が多く、八疊敷の小舎では狹隘なので、門人等鋸をこり、鋸を手にし、土石を運び、地をならし、壁を塗り、屋根を葺き、十疊半の一室を建増したといふ。その村塾の前に倉庫がある。先生は刻苦精勵、寸陰を惜しみ、行住坐臥にも、講話抄録を絶たなかつたから、倉庫に

阿武川 山口縣の東北山中に發し、西流して、萩町にて日本海に入る。

萩 山口縣阿武郡の町。

久坂玄瑞 維新の志士。

長州藩士。元治元(二

五二四)年歿す。年二

十六。

高杉晋作 維新の志士。

長州藩士。慶應三(二

五二七)年歿す。年二

十九。

木戸孝允 明治の功臣。

舊長州藩士。明治十六

年歿す。年四十四。

山縣有朋 明治の功臣。

舊長州藩士。大正十一

年歿す。年八十四。

東光寺 黄檗禪宗の寺。

元祿四年毛利家の創營

なる。

松陰 吉田松陰。長州藩

士。百合之助の次子。

二十七歳にして松下村

塾を開く。安政六(二

五一九)年歿す。年三

十。

安政五年 孝明天皇の御

宇。

左傳 春秋左氏傳。三十

卷。孔子の執筆せし春

秋の註釋書。左丘明の

著といふ。

八家 唐宋八家文。三十

卷。支那清時代の沈德

潛の編になる。唐宋八

大家の佳作を輯めたる

もの。

七つ 午後四時頃。

史記 百三十卷。漢の司

馬遷の著。支那古代の

歴史。

安積良齋 儒者。名は重

信。岩代國の人。文章

に巧なり。萬延元(二

五二〇)年歿す。年七

十六。

佐久間象山 幕末の志

士。信濃國の人。名は

啓。元治元年殺さる。

納むるところも、殆ど擧げて皆書冊である。
先生の著書としては、幽囚録・回顧録・幽室文稿・二十一回叢書をはじめ、三十歳で果てられた生前の作品が實に百二十餘冊に上つてゐる。

先生は老中間部詮勝要撃の事に坐し、安政五年十二月投獄の命を下され、翌六年七月江戸の獄に入り、死罪に斷ぜられた。

親を思ふ心にまさる親心今日のおこづれ何と聞く
らむ

は十月二十日認めた永訣の書に記された歌であり、
身はたごひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし
大和魂

年五十四。
下田 静岡縣賀茂郡の港。
「擧げて皆書冊である」

中間部詮勝 マナベアキカ
ツ。越前國鯖江の藩主。安政四年老中に任じ翌年辭す。明治十七年歿す。年八十三。

「永訣の書に記された歌」

は獄死の前二日、十月廿六日留魂録に記された辭世の歌である。その留魂録、四つ折の塵紙が六七枚、かすかに硝子戸を隔てて見える。今日は何とかいふ人がゐないといふので、硝子戸はごうしても開けてくれぬ。

たち去りかねる硝子戸の内に、留魂録とならんだ先生の抄録の中に、松葉に木の子を添へた繪に、

名月に香は珍らしき木の子かな

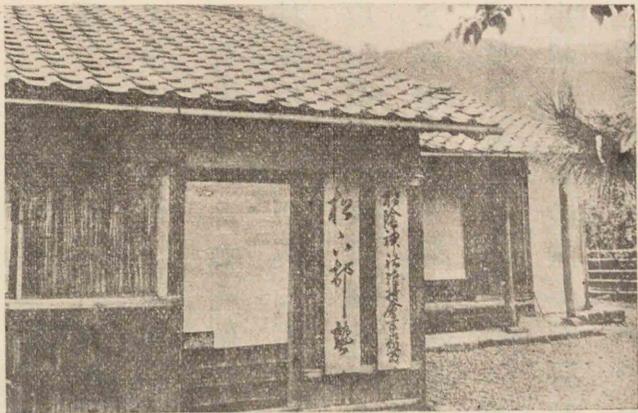
と題したのが見える。先生が漢詩と短歌との外に、かうした俳味にも恵まれてゐた事はいかにもうれしい。十八疊の松下村塾は、安政三年七月から五年十二月の入獄まで、わづか二年しか開かれなかつたが、維新回天の大業を仕上げた志士、高杉晋作・久坂玄瑞・木戸孝允・品川彌二郎・山縣有朋・伊藤博

「留魂録に記された辭世の歌」

俳味

回天の大業
品川彌二郎 明治の功臣。舊長州藩士。明治三十三年歿す。年五十六。

文などは皆この村塾から輩出した。



「お前はもう何歳になる。」

先生のあこに残り明倫館舎
長となり奇兵隊長となり内は
俗論黨と戦ひ外は隣藩幕府外
國を相手に砲彈と言論とによ
つて折衝した門下生高杉晋作
村塾も僅に二十九歳の若さで果て
た昔ながらのまき垣に添ひ柿
の木もこをめぐり村塾と幽
囚の室とのあたりを徘徊して
あると空に聲がある。

伊藤博文 明治の功臣。
舊長州藩士。明治四十
二年薨す。年六十九。
明倫館 長州藩の學校。
享和四(二四六四)年の
創立。
奇兵隊 高杉晋作の養成
せし軍隊。
俗論黨 幕府の長州を伐
ちし時、恭順して罪を
幕府に謝せんさせし長
州藩内の一派。
折衝

「昔ながらのまき垣」

「僕はもう五十二歳、あこ六年で先生の壽命の倍になる。」
「いや人間の働くのは二十歳を越してからだ。松陰先生は
正味十年働いて亡くなられた。お前などは五十二から二十
さし引いて三十二年、三倍もの歳月を過して來たのだ……
たゞ無駄にな。」

「正味九年働いて」

空の聲がつゞく。

「維新の志士は、不完全極る學問をなし、三十歳足らずで亡
くなられたが、あれだけの仕事をした。今の連中は大手を振
つて完全な學問を修めてゐるやうだが、仕事は何一つ出來
ずに、たゞ年だけ食つて行くやうだ。」

「不完全極る學問」

明倫館のあこに建てられた小學校からは、完全な教育を
受けつゝある男の子女の子が、今三々五々家路をさして歸

「完全な教育」

つて行く。(下村海南の文による)

君がため花とちりにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな(加納諸平)

朝日影とよさかのぼる日の本の大和のくにはるのあけぼの(佐久良東雄)

天つ風吹くや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞおもふ(平野國臣)

みちのくの外なる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠くものをこそ思へ(佐久間象山)

ものゝふの臣の男の子はかゝる世になに床の上に老ひはてぬべき(久坂玄瑞)

ものゝふの大和ごころをより合はせ末ひとすぢの大綱にせよ(野村望東尼)

下村海南 法學博士。名は宏。明治八年和歌山縣に生まる。東京帝國大學政治科の出身。

加納諸平 國學者。安政四年歿す。年五十二。よさかのぼる

佐久良東雄 幕末の志士。萬延元年歿す。年五十。

平野國臣 幕末の志士。元治元年歿す。年四十三。

野村望東尼 幕末の女流歌人。慶應三年歿す。年六十二。

七 繪馬の名畫

神社佛閣に繪馬を奉るこゝ、其の昔は眞の馬を牽きて捧げしなるを、後に繪に畫きて奉納したるが、繪馬の字の如く、



村 篁 庭 霽

馬の繪に限りたるならん。其の繪馬より思ひ附きて、さまざまの繪をも畫きて堂社へ奉納し、信仰奉謝の意を表はしたるなり。此の事はなかく、太平記の阿保秋山の河原軍の條に、されば其の頃靈佛靈社の御手向、扇團扇のばさら繪にも、阿保秋山が河原軍さて書かせぬ人はなし。こゝあり。此の御手向こゝあるは、繪馬の額の類をさしたるなり。

「さまざまの繪をも畫きて堂社へ奉納し」

太平記 四十卷。花園天皇の朝より後村上天皇の朝まで凡そ五十年間の歴史を記したり。河原軍のこゝは同書第二十九卷に見ゆ。作者不詳。ばさら繪 粗末なる繪。

阿保秋山の河原軍は正平年中の事なるが、其の頃といひたれば、直ちに其の年中の事ならず、太平記の作者の頃とするも、足利中世の事なるべし。其の頃より既に靈佛靈社に名高き武勇の事などを畫きて奉納せし事盛んなり。こせば、繪馬の額には雪舟、雪村の名畫もありしか知るべからず。されど燒亡に罹り、風雨に曝されて、京都清水寺の繪馬の額にも、天正以前のは無しといふ。繪馬の名畫といへば、古法眼元信の馬と先づいはれて、名畫名筆の名あるはそれ以後のもの多し。此の繪馬の額を堂社の寶前に掛け奉る趣意は、前にいふ如く、信仰者が祈願奉謝の爲なれど、後には畫工が一世に名を振ひ、末代に蹟を留むる名譽の展覽會の如くなりて、其の畫に精神を注ぐこと尋常ならず。これ繪馬は諸國の人の

正平 後村上天皇の御代の年號。二〇〇六年。

「足利中世の事なるべし」

雪舟 畫僧。俗名は小田等楊。寛正中、明に入り、後、周防の靈谷寺及び石見の大喜庵に居り。永正三(二一六六)年歿す。年八十七。

雪村 畫僧。周文の畫風を慕ひて一家を成す。正平二(二〇〇七)年歿す。年五十七。

天正 正親町天皇の朝の年號。二二三年。

古法眼元信 狩野家二世の畫匠。足利氏に仕へて繪所預、越前守に任ぜらる。永祿二(二一九)年歿す。年八十四。

集り來りて見るものにて、一筆一畫の粗誤ありても、直ちに

指摘せられて其の過を改め難ければなり。

京都清水寺に最も古しと傳へらる、長谷川久藏信春の時致・朝比奈草摺引の圖は、天正二十壬辰卯月十七日とありて、其の勇壯のさま見る人腮を振つて感歎しけるが、或時猪熊の染物屋の下女が、朝比奈の袴の襷の折れたる上にもかまはず、舞鶴の紋を畫きたるを見出し、折目も皺もなき繪なりと笑ひしより、都中の取沙汰になりしを、信春聞きて、一生此の事を苦に煩ひたりといふこと、西鶴の織留に出でたり。此の如く繪馬は萬人の見る所、いづれいづこに如何なる繪難坊あるも知るべからず。繪馬の額を畫きて堂社に掲ぐる事は、其の頃の繪師の死活問題ともいふべきほどの大事な

「一筆一畫の粗誤」

長谷川久藏信春 雪舟派の畫家。天正時代の人。

朝比奈 名は義秀。和田義盛の第三子。三郎と稱す。勇武多力無雙と稱せらる。義盛敗戦の時三十八歳にして、從者を率ゐる安房國に走り、終る處を知らず。猪熊 京都市東山區三十三間堂の附近。

「都中の取沙汰」

西鶴 井原氏。俳人、小説家。元祿六(二三五三)年歿す。年五十二。織留 西鶴織留。六卷。繪難坊

りしなり。同じ御寺に、延享三年に服部梅信といふ畫工、同じく草摺引の題を掲ぐ。これまた朝比奈が鶴の丸の紋を襲も折目もかまはず畫きこなしたり。或人難じて「天正の信春舞鶴を襲に拘らず畫きて、一生の悔をなしたり。同じ堂に同じ圖柄を畫きて、其の過を再びする事如何にぞや。」と云ひしに、梅信傍を向きて、是は掛額を畫く畫家の法なりとのみにて取合はざりしとぞ。信春は古法眼の弟子にして、其の筆法を得たりと稱せられ、舞鶴の非難を氣病みにして終りしといへども、其の額は名畫として今に尊重せられ、掛額を畫く法を得たりと自ら安んじたる服部梅信は、其の畫系すら定かならずして、見る人其の畫を妙とせず。其の得失は知るべきならずや。

延享三年 櫻町天皇の御宇。二四〇六年。服部梅信 浮世繪師。延享時代の人。

「名畫として今に尊重せられ」
「畫系すら定かならず」

淺草觀音に掲ぐる嵩谷の鶴の額も、はじめ猪の早太は小刀を逆手に持ち居たりしを、或人注意して「平家物語の本文



にも「猪の早太つと寄り、落つるころを取つて押へ、柄も拳も通れ鶴通れと、續けざまに九刀ぞ刺したのりける。」とあれば、刀を順に持ちて額刺すやうにありたし。と云ひしに、嵩谷悦びて、一旦掛けたるを引きおろして、今の如く書直して名譽を残したり。王子稻荷神社の額堂の名畫、柴田是真翁筆の鬼女圖は、天保十一年翁二十四歳の作にして、また一代の作品中の秀

淺草觀音 淺草寺。東京市淺草區にある天台宗の寺。
嵩谷 畫家。又屠龍翁と號す。文化元(二四六四)年歿す。年六十四。
平家物語 十二卷。平氏一門の興亡を敘したる書。作者未詳。猪の早太の事は卷四「鶴の事」に見ゆ。

「一旦掛けたるを引きおろし」

王子 東京府北豐島郡王子町。
柴田是真 畫家・蒔繪工。明治二十四年歿す。年八十五。
天保十一年 仁孝天皇の御宇。二五〇〇年。

逸のものなるが翁自身も晩年幾度か此の圖を試みたれど、また此の如く會心のものを作る能はざりきといふ。

予輩また故芳年氏に聽ける事あり。氏は此の是眞の額を欽慕して、時々王子稻荷へ詣りてこれを眺め、密かに此の圖を作りたることあれども、遠く及ばず、筆を抛ちて歎息したること數度なりといへり。名工名工を知るといふべし。此の繪の國華に出でし時、瀧文學士に對し、是眞翁二十四歳の作とすることは、裏書の年號及び社傳によりて確實なるべきが、後年いかに名大家と崇められしとは云へ、未だ二十四歳の若輩にして此の大作を揮毫せんこと、自ら名のためにしたりとしてみても、餘りに大膽なり。又祈願主ありて依頼したりとしてみても、此の時二十四歳の是眞に、此の桐栴目、金箔置き

芳年 畫家。月岡芳年。本姓は吉岡、號は大蘇。明治二十五年歿す。年五十四。

「名工名工を知るといふべし」
國華 瀧精一の主宰する美術雜誌。
瀧文學士 今は文學博士。名は精一。東京帝國大學教授。

大額に筆をつけさせんこと、如何あるべきか。と問ひたるに、「さればなり、是眞に伯父あり、そは有力なる大工の棟梁にて、王子稻荷の今の社を建てたれば、其の記念ともして、若き甥に此の大畫を託せしならん。是眞も我が伎倆を一世に紹介せんとする伯父の慈愛に感じて、畢生の力を籠めしものならん。」と答へられぬ。傳歴を聽けば、一段と名畫の趣味を深く感じぬ。瀧の川の紅葉狩に鬼女といへば縁あり。これは渡邊の綱に切られし腕を取りかへす鬼女の額なり。散策のついでに立寄りて見れば、景色にも勝る趣あるべし。二十四歳にして此の名畫あり。書畫文藝といはず、諸道にたづさはる者仰ぎなば、悚然として怖るゝところあるべきか。そは鬼女の勢の凄じき外に、自ら奮勵感憤するところある故なるべし。

「畢生の力を籠めしものならん」

瀧の川 荒川の支流。王子稻荷神社の附近を流る。紅葉の名所として知らるれど今は廢れたり。
渡邊の綱 源賴光の臣。

悚然

繪馬は昔の畫工の大展覽會なり。繪馬は畫工畢生の榮辱の懸るものなり。されば見るに心のあるべきものこそ言ふべけれ。(饗庭篁村の文による)

昔京都の大内裏造られたる時、羅城門を建てられしを、桓武の帝叡覽ありて、此の門一尺高し。必ず風にあたりて破損あるべし。柱一尺をつめよ。と勅誼ありけり。門造り果てて又御覽じて、初め悪しく見てけり。一尺五寸切らすべかりしを、今五寸切るべし。と仰せありければ、大工等恐懼して申すやう、一尺切れるとの勅誼ながら、仰せのまゝに切り候ひては、見苦しと思ひて、五寸を切りて候。初に御覽じたがへるにはあらず、五寸隠して、切り候はぬを、御目のほど恐れ入り奉りぬ。と申し上げぬ。帝、今切らば遷都の間にもあはじ。但し風にても荒るれば、吹倒さるる事もあるぞ。と勅誼ありけり。都うつりの後、末の世に至り、三度ばかり吹倒されけるとこそ。(橋南谿の文による)

「繪馬は畫工畢生の榮辱の懸るものなり」

饗庭篁村 小説家。名は與三郎。江戸に生まる。大正十一年歿す。年六十八。

大内裏 ダイダイリ。皇居を始め諸官衙を含みたる一郭。平安京の北中央にあり。羅城門 ラジャウモン。平安京の外郭、正南にありし門。今、京都市の南方東寺の西方にその址あり。

八 川柳點

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの皆傷く。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に違あらざらしむ。時に輕薄なる鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。

いで、左にその二三を擧げていひ試みん。
あがるなこいはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て御慶帳の記名に困り、さらば、來ぬ分にして下され。といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代り

「剃刀の如きか」

諷刺

突梯

鄙俚

「要するに寸にして珍なるものなり」

御慶帳 ギョケイチャウ。年賀回禮者の姓名を記入せしむる帳簿。

に、名刺受を玄關に出す。これもあがるなこいはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき

よくあることなり。後の祭にもあれ何にもあれ、番をつくるはつけざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり訓誠ともなる。

本降りになつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわるし、急がでもわるし。こにかく考へ物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかききなり。塙檢校が、さてく、目あきは自由な。こいひしに似たり。

「これもあがるなといはぬばかり」

「よくあること」

道灌 太田持資のこと。足利末期の武將。初めて江戸城を築く。文明十八(一四六)年殺さる。年五十五。その歌に「いそがずばぬれざらましを旅人のあこよりはる、野路の村雨」
「一對の巧語」
塙檢校 名は保己。國學者。武藏國に生ま

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乗せたる類のこゝ多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくる、日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし事實なるをいかにせん。かの赤穂の城渡しの際、お金配分に高割を唱へし小野九太夫は、この露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑

「人情の弱點」

高割 小野九太夫 假名手本忠臣蔵に出づ。鹽谷判官の老臣にして、食禁怯懦なり。

る。七歳にして明を失ひ、十歳の時國學に志す。後、群書類從を編纂刊行し、和學講談所を設く。文政四(二四八一)年歿す。年七十七。
狐を云々 見當違ひのわけの分らぬこゝにいふ俗談。
「あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや」
「食ふより外に能なき」

稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

○戸隠も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。毛抜に髭ぬく閑人の所作を、神代に附會したる、働きあり。

○忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きこめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、まことに及び易からず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記の、頼政鶴を射る條に、黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと矢所さだかならず。こあり。乃ち郎

戸隠 信州戸隠山なる戸隠明神。手力雄神を祀る。

「働きあり」

忠盛 平氏。清盛の父。

仁平三(一八一三)年卒

す。年五十八。平家物語

語卷六「祇園の女御の

事」に見ゆ。

「聯想の一階を飛越して」

隼太 頼政の郎等猪の隼太。

盛衰記 源平盛衰記なり。

平家一門の興亡を記す。四十八卷。鶴の

事同書第十六卷「三位

等隼太が左近の櫻に鼻突きあててまごくする、一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭を噛つて息をつぎ

兄祐成が急を救はんこて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を噛らせたるは、この作者の氣轉なり。

○佐野の馬戸塚の坂で二度ころび

戸塚の坂は鎌倉入の一難處。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

入道藝等事」に見ゆ。

頼政 源氏。仲正の子。

射を善くし、和歌に巧

なり。晩年剃髮し世に

源三位入道と稱す。治

承中以仁王を奉じて兵

を擧げ、敗れて治承四

(一八四〇)年宇治平等

院に自殺す。年七十

七。

「いかなるへうきん者

ぞ」

噛る——かじる

大磯 神奈川県中郡大磯

町。

「この作者の氣轉」

佐野 源左衛門當世。諸

曲鉢の木に出づ。

戸塚の坂 神奈川県鎌倉

郡。

なづむ

「誇張したるに」

道風 小野氏。書家。三

蹟の一。貞元(一六

三六)年死す。

取合せの妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるごころに一種の面白味あるなり。

釣れますかなごご文王そばに寄り

流石の聖人文王ご奇傑太公望ごの邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「なごご」の語、胸に一物ある趣を状し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

(金子元臣の文による)

清盛の醫者は裸で脈をとり

居候三杯目にはそつと出し

雷を真似て腹掛やつとさせ

武者一人叱られてゐる土用干

旅歸り草鞋で覗く枕蚊帳 (川柳)

「突然に仕立てたる」

文王 周の武王の父。

太公望 呂尚といふ。文王・武王を輔け。天下を一統せしむ。
「なごごの語」

金子元臣 歌人・國學者。明治元年東京市に生まる。現に御歌所寄人たり。

九 障子の國

日本に歸つて來て、嬉しいものの一つは、障子である。家の中に坐つて、白い障子の紙を通して來る光線を眺めるくらゐ、心持のよいものは少い。障子は晴れた日によく、雨の日によく、燈火をつけた夜には、更によい。

私は自分の書齋がどうも氣が落着かないので困つてゐた。しかしどういふ譯とも知らずに四五年ほどを過して來た。つい近頃、それは障子が少いのだと氣がついた。三方の一方だけが障子で、他の二方を擦硝子にしてあつたために、机に落ちる光線が散漫で、氣が落着かなかつたのである。そこで、二方の硝子戸のところへ日本の障子を立てて見たら、す

「嬉しいものの一つ」

つかり部屋に落着きが出来て、いくら書きものをして居ても草臥れなくなつた。やはり我々の祖先は、この風土と我々の性情とに適するやうな工夫を、住居の上にも凝らしてくられてゐたのである。

日本の風景を美しくするものは、やはり此の障子である。久方振で日本に歸つて来て、灯こもし頃の民家につく「あかり」を車窓から見渡す氣持といつたら、比較するものがない。四邊の光景が、白い紙に赤々と映る燈火の色で軟いで來る。それに人影を印する様子などは、日本でなくては見られない情緒である。

尤も、冬時の寒さを凌ぐ手段としては、これは又驚くほど不完全なものである。勿論溫和な氣候のために、凌げないこ

「やはり我々の祖先は」

「日本でなくては見られない情緒」

冬時

いふほどの酷寒が來ないから、慣れた身には何とも感じないのであるが、外國人にはこても耐へられないさうである。或佛蘭西の婦人が、始めて日本の家で冬を過した時に、

「日本人は驚くべき國民だ。一枚の紙を以て全宇宙と戦ふ」といつたといふことであるが、如何にも面白い見方であると思ふ。

此の夏、始めて私を訪問した年若い學者が、その次に偶然出會つた時に、

「あなたが白足袋で、日本の家に住んでゐようとは思はなかつた。日本趣味ですね。」と、驚いたやうにいはれた。私にはこれが可笑しかつた。私が折々外國へ出かけるので、日本に居ても、年中洋服を着て、椅子に腰をかけてゐるものと想像し

「一枚の紙を以て全宇宙と戦ふ」

「私にはこれが可笑しかつた」

て居られたらしかつた。

しかし、我々日本人は、外國に長く居れば居るほど、妙に日本趣味になるものである。永井荷風氏も、野口米次郎氏も、また恩師新渡戸稻造先生も、皆日本趣味を好まれる。私の伯父は十六の時に獨逸に行つて、十三年たつて歸國した人であるが、始こそは洋館を建てて、洋服を着て暮してゐたが、いつの間にか洋館に疊を入れ、次には離れた茶室を造り、しまひには、その茶室に籠城して、被布を着、佛書のうづたかい中に埋つて死んで行つた。日本人ばかりでなく、張之洞を初め支那の新知識の人達の話を聞いて見ても、これらの人たちも、やはり年と共に西洋生活から支那生活に歸つたさうである。つまり東洋文化といふものが、一種の強い力を以て東洋

永井荷風 小説家。名は壯吉。明治十二年東京市に生まる。外國語學校修學。永く海外にあり、歸朝後慶應義塾大學教授たり。今辭す。野口米次郎 詩人。明治八年愛知縣に生まる。慶應義塾修學。永く海外にあり。歸朝して現に母校の教授たり。

張之洞 支那清朝の名臣。直隸省に生まる。(西紀一八二七—一九〇九年)

「東洋文化といふものが、一種の強い力を以て」

人を引きつけてゐるのであらう。

西洋人、殊に亞米利加人が、日本に來て羨ましがるのは、日本建築の白木造である。木を自然のまゝに出して使つてゐるのが、たまらなく氣に入るらしい。それは日本人に亞いでは、亞米利加人が木造の家を好むからである。亞米利加における木造の家は初代植民の頃の家であつて、今は次第に鐵と石と混凝土との摩天樓がはびこらうとしてゐる。彼の國人が、その昔の風情をなつかしむところから、さてこそ日本の木造の家を羨ましがるのである。或亞米利加人は、私の家に來て、木の柱を幾度も撫でながら、「いゝなあ、いゝなあ。」子供に羨ましがつた。

私は今日の日本が、美しい日本趣味を次第に失ひつゝ、あ

摩天樓

「木の柱を幾度も撫でながら」

ることを悲しむ。それも風雅な日本趣味と共に、純粹な西洋藝術が並び興るのならよいが、安つほい俗悪な皮相的な文化住宅なんぞばかりが出来て、固有の日本趣味が亡んで行くのは、如何にしても残念である。新興國で殺風景な亞米利加ですら、美しい町、美しい村、美しい家を作らうと努力してゐるのに、藝術の國日本において、繪卷物のやうな傳統の美しさの次第に失はれて行くのは、黙つて見てはゐられない氣がする。

日本には日本の美しさがある。我々は、その固有の美しさを護りかつ育てて行かねばならぬ義務がある。

(鶴見祐輔の文による)

風雅
皮相的

「日本には日本の美しさがある」

鶴見祐輔 評論家。明治十八年群馬縣に生まる。東京帝國大學政治科出身。

一〇 鎮守の森

滿目蕭條として、田も畠も霜枯の風情見るかげもなき間に、一むらこんもりとして綠鬱葱たるものは鎮守の森なり。金も石も燦けんばかりの夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて、社前の注連繩さらさらと鳴れば、こゝは村人等の安樂世界となりて、拜殿に晝寐の夢は圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦蘿紅に染めいでて、夕日の色もまばゆし。花朧なる曉、月明き夜、松杉小暗く茂りて、瑞籬のほこり神さびたり。詩趣ひこりこゝに饒かにして、何事のおはしますか。は知らねども、神々しく覺ゆるなり。

「一むらこんもりとして」

燦く
殿角

花信

蔦蘿

瑞籬

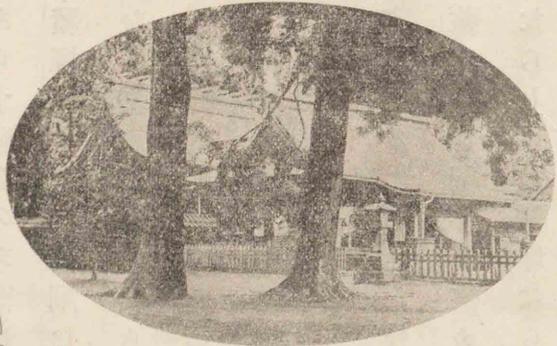
日落ちて、月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎮守の森は舞蹈場と化するなり。祠頭の旗幟翩翩として風に靡く時、一村の老幼往還織るが如く、鎮守の祭禮は、一歳中復と得がたき歡樂なり。年豊かなれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎮守の森は一村の望を集め、一郷の中心として、神聖なる、而も面白き處たるなり。

かゝる鎮守の森にいます神は、多くはその土地、その土着の民と、何等かの關係あり。溯りてこれを考ふれば、氏族部民がその祖先を祀りたるもの少からず。諸國に鎮座し給ふ神社は、畢竟鎮守の森の大なるものなり。鹿島香取の神宮は、經津主神・武甕槌神の子孫が創めたる所にして、宇都宮二荒神社は、毛野君の一族がその祖先を祀れる所なるべし。その

婆娑 翩翩

「その土地、その土着の民と、何等かの關係あり」

鹿島神宮 官幣大社。茨城縣鹿島郡鹿島町にあり。武甕槌神に經津主神・天兒屋根命を配祀す。
香取神宮 官幣大社。千葉縣香取郡香取町にあり。經津主神に比賣大神・武甕槌神・天兒屋



香取神宮

一層大いなるものには出雲大社あり。その最も大いにして、日本の鎮守たるものには、五十鈴川の上に宮柱太しき立て、千木高知ります伊勢大神宮あらせ給ふなり。

これを小にしては、一村の中心にして、これを大にすれば、帝國の中心たり。祖先の神靈、前賢の精魂は、長へに鎮守の社に留りて、子孫後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵自進せしむべし。天祐神助の信仰は、勇氣鼓舞の最良法なり。而も信仰とは、權道に

「これを大にすれば、帝國の中心たり」

「直ちに神に接し、靈に感ずる唯一の法」

の法なり。祖先崇拜なるかな。これひこり原始の觀念のみにあらず、祖先の功勳は後人奮勵の龜鑑たり、子孫の名譽心を發揮すべき興奮劑たり。たゞその崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回顧的たらしむる勿れ、進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめざるべからず。

此に於てか、鎮守の森をして、一層、一村一郷の中心たるの實あらしむべきなり。鎮守の森をして、更に神さびて神靈の窟屋たるに適せしむべきなり。これが爲には、苗樹を植ゑ、草萊を除き、祠宇を修め、園池を美にし、以て一村一郷の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會處たらしめ、心なき村人にも美の觀念を興ふる處、他に向かつて誇とする處、異郷に在りても猶戀々の思あるべき處たらしむべし。小學兒童の運動

「進歩的」

「自覺的」

窟屋
草萊

會もこれを中心として、この附近に行はしむべし。小なる村落圖書館の如きも、その附近に設けらるれば尤も妙なるべし。鎮守の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上に得る所極めて大なるものあらん。

(笹川臨風の文による)

「一村一郷の中心」

笹川臨風 文學博士。評論家。名は種郎。明治三年東京市に生まる。東京帝國大學國史科の出身。現に東洋大學教授たり。明治神宮 東京府豊多摩郡代々幡町代々木に鎮座する官幣大社。明治天皇・昭憲皇太后を祀る。

明治神宮は林の中にあり。その林にはあらゆる樹木を網羅せるが、神門の内拜殿を正面にして廻廊に圍まれたる神庭には唯十數株の喬松あるのみなり。吾人は日本の國柄より見て、樹木の選擇その宜しきを得たるを歡喜せずんばあらず。日本は松の國なり。松ありて神の廣前ますく尊し。明治神宮に詣づるもの、廣前の松に思を致すところ無かるべけんや。

(大町桂月の文による)

風化のり、ほら、
アエ行、
風化をより方に
みちいって行く
に、大つん、
り、よからう。

あ、あ、あ、
あ、あ、あ、

昔のことは
あ、あ、あ、

月のなり夜

一一 四季の雨

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄渡りぬるものな
 れ。されど闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹
 交ふは、又優りぬるやうに覺ゆ。いへば、雨ぞいと優りぬる
 を。いふ、いかに。と問へば、いでや早天の雨は更なり、草木の
 花咲き、實のるも、皆この恵にこそあんなれ。又その感情の深
 さをいはば、今日は元日なりけり。いふに、雨そぼ降りて霞
 み渡りたるは、げに春かな」とぞ思ふめる。師走の晦ののどや
 かに降りたるも、春待ち顔にていさをかし。すべて春は雨こ
 そ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いこまやかに降れるが、
 衣潤せど降るこは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、任捨て

「雨ぞいと優りぬるを」

師走 シハス陰曆十二月の晦
「春は雨こそ長閑なれ」

7 交月 (つぎの月)
 8 葉月 (かき)
 9 長月 (ながつき)
 10 神無月 (かみなし)
 11 霜月 (しもづき)
 12 師走 (しゅうそ)

し蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に緑稍、添はり
 行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、共にいと長閑なり。
 燈火挑げても、何となく光濕りたるに、鐘の音のほのかに響
 き來るも、心澄渡りぬる。ぞかし。その外、梅が香の濕り、夜深く
 匂ひ渡るも、花に憂しとかこちぬるも、あはれはありけり。春
 も老いゆく頃、蛙の時を得顔にすだくもをかし。郭公の初音
 いかにと思ふ頃、村雨のはらく、と降出でたるも。五月雨の
 幾日も降暮して、書の卷々繰返しつゝ、居たれば、何となく世
 の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。又暑さに堪へかぬ
 る頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹落ちたるに、柳
 蓮なんごの葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる
 雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降り來て物音も聞え

枯生

かこつ
「春も老いゆく頃」
すだく

「暑さに堪へかぬる頃」

ず、土の香の匂ひ來るもいご心地よし、軒端は玉の簾かけた
らむやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つ湖になり
て、あるは瀧落し、又は水走らせたるに、人々暫し物いはで、打
守り居たるもをかし。稍、雲薄くなれば、池の面には數ふるば
かり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて、餌拾ふやうなり。初
め雲の立出でし方は、はや空の一入縁に見えて、虹など見
ゆるに、木々の緑の庭潦に影見ゆるもいと涼し。老いたる女
など、雷の音に驚きて這出でたるが、『今日のは幼かりし時の
ごごとくよく霽れにけり。今時のはかく霽るゝごご稀なり。』な
んど、はや繰言いふもあり、『彼はかくあわてし。』など、かたみに
いひて笑ひごよみつゝ、『今日は蚊も少かるべし。雷の音もい
ご微かなり。この頃の暑さも忘れぬ。』さて、端近う出づれば、夕

玉水

虹—にび。

庭潦

繰言
かたみ

月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥え膨れたる蛙の
物待ち顔に空打睨みて、ふつゝ、かなる音に鳴くもをかし。秋
來る頃の雨は、昨日に變りて何ごなう淋し。萩の上風、外山の
鹿の音など、月よりも身に沁む心地ぞする。常に聞馴れし
笥の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨も亦をか
し。まいて稍、夜寒の頃、鳴咽したる蟲の音の、雨のをやみに幽
かなる聲して、近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々も
染めなむご思へば、『茸なども生ひ出でなむ。栗もはや落つべ
し。』など、童の物淋しげに燈に向かひつゝ、いひ出づるも、げ
に様々なり。夜深き鐘の音の打濕るものから、さすがに秋は
聲牙えて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友の事も思ひ出でて、鐘
撞く人の心をもあはれご思ふばかり、感情は深かりけり。紅

「秋來る頃の雨」
外山

笥—かけひ。

「稍、夜寒の頃」

生ひ—おひ

「夜深き鐘の音」

物事かうり行くこと

葉の染め添ふも、白菊の移り行きて一盛り見するも、尾花の露重げに打萎れたるに、龍膽の怨深く咲きたるあたりもつきんくし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲出でたるが、晝過ぐるまでも凋み後れたる、亦あはれなり。野分の風はおどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは、秋の習なるべし。時雨のさこ音して、夕日に白く降り來るも、又音かへて枕さふもをかし。月よりも、闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや。こいへば、かやうにいひ並べては、げにもこいふべからむが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨は一昨日より降出でしをこ、心の中に思ひて聞き居しも、亦をかしかりけり。

(松平定信「花月草紙」)

龍膽



つきんくし
おどろくし

「月よりも、闇の夜よりも、あはれ深きもの」

一昨日—をさつひ
松平定信 樂翁と號す。
田安宗武の第三子。白川城主の松平氏を嗣ぎ、老中となりて謂はゆる寛政の治を致す。文政十二(二四八九)年歿す。年七十二。

一二 椿落ちて (句評)

私は今蕪村の俳句集を机の上にひらいて、其の中の句を拾つて見る。

椿落ちてきのふの雨をこぼしけり

芭蕉に「落ちざまに水こぼしけり花椿」といふ句がある。芭蕉のは其の哀な美しさを見ただけだが、蕪村のは「きのふの雨」と興じて、其の小さな猪口のやうな花に雨がたまつたまま晴上がつつてゐた春の朝のすがすがしい感じを巧みに生かしてゐる。此の二つを比べると、蕪村の方が確にうまい。然し、かうした技巧が、もし單なる技巧ばかりのものになつて、即ち理智的になつて、自然味を失ふならば危険である。例へ

蕪村 與謝蕪村。俳人。本姓は谷口。名は信實。攝津國天王寺村の人。兼ねて書畫をよくす。天明三(二四四三)年歿す。年七十。一説に六十七ともいふ。
芭蕉 松尾芭蕉。俳人。名は甚七郎。伊賀國の人。北村季吟に従ひて、俳句を學び世に正風の祖と稱せらる。元祿七(二三五四)年歿す。年五十一。

ば青空や棒が落すよべの雨といふ風にすると月並になる。かうした月並の深淵をすぐ下に見て、そこには落ちずに、巧みに踊つてゐるやうな處に、蕪村の作風が見える。若葉して水白く麥黄ばみたり



蕪村筆蹟

水彩畫の

やうな句であるが、やはり繪ではなく詩である

よべ 月並 「月並の深淵をすぐ下に見て」

花影上、欄干、山影入門、などすべてもろこし人の寄作也されど只一物をうつしうごかすのみ我日のもこの俳諧の自在は渡月橋にて月光西にわたれば花影東に歩むかな 平安夜半翁無村 「やはり繪ではなく詩である」

である。若葉して「黄ばみたり」等の言葉は其の感じを表はしてゐると見るべきである。

涼しさや鐘をはなる、鐘の聲

言葉は實に平易で、明徹で、何の工夫をしたやうな窮屈さもなく、少しの彫琢さへしたやうな痕跡もない。一氣にすらしと讀下されて、丁度鐘を離れる鐘の聲のやうに、自然の調子をなしてゐる。然し此の句を成すまでに、作者はどれだけ苦心推敲をしたことか。——ごおんと撞かれた釣鐘の音が、ごごご……んと音波を作りながら大氣の中に擴つて、其の鐘から遠くの遠くの方まで、風につれて消えて行く。——さうした夏の夕べの涼しい感じを十七字にいひ表はさうと、諸君自ら工夫して見らるゝがよい。そして此の句以上に完

彫琢

「自然の調子」

推敲

全に、これ以上に適確に云ひおほせるかどうか？私は此の句を讀むと、まづ作者の洗練しきつた技巧の牙えを突きつけられたやうな氣がする。

團扇して燈消したり今朝の秋

行燈の灯を團扇であふいで消したといふ日常の事に、立秋の氣を感じたのである。如何にも立秋である。その感じに紛れがない。決して今朝の冬でもなく夏朝でもない。

燭の灯を燭にうつすや春の夕

此の句は如何にも春の夕として紛れがない。秋の夕でもなく夏夕でもない。かやうな感じの微妙な調和を見ることは、藝に達した人でなければ出来ないことである。今朝の秋は、今朝から秋になるといふ日の、其の日の朝の意である。

「洗練しきつた技巧の牙え」

「感じに紛れがない」

「感じの微妙な調和」

稚兒の寺なつかしむ銀杏かな

銀杏の葉が黄ばんで、其の黄金のやうな美しい葉が地上一はいに散敷く頃、其の葉を拾ひにこいふよりも、お寺の庭の廣い、しつこりとした土に心を引かれて、幼兒達が寺へ遊びに来る。寺なつかしむといふ言葉の齎す感じが、秋も深い朗かな日のおつこりとして淋しく、ほかくとして潤ひのある心持を傳へてゐる。そして銀杏かなといひ据ゑた言葉の調子が、天空に突立つ大きな銀杏の一樹の姿を其のまゝに寫してゐる。

山は暮れて野は黄昏の薄かな

壯大な景色の句である。山はもうすつかり暮れて暗くなつたが、其の麓の野にはまだ夕べの明りが仄かに残つてゐる。

「一樹の姿を其のまゝ」

る。其の黄昏の薄明るさの中に、薄がそよいでゐる。山は暮れて野は……」と大きくいひ表はした言葉の調子から、此の野はそこら一面に茫々たる廣野であり、此の薄は其の廣野一面に生え擴つてゐる心持が浮きだして來る。或は其の薄は、山の方にもあるのであるのかも知れぬが、山は既に暮れて見えないのである。今や此の廣野さへも、一分一分に闇の中に没了されようとしてゐる其の無氣味な感じを、主として味はふべきである。

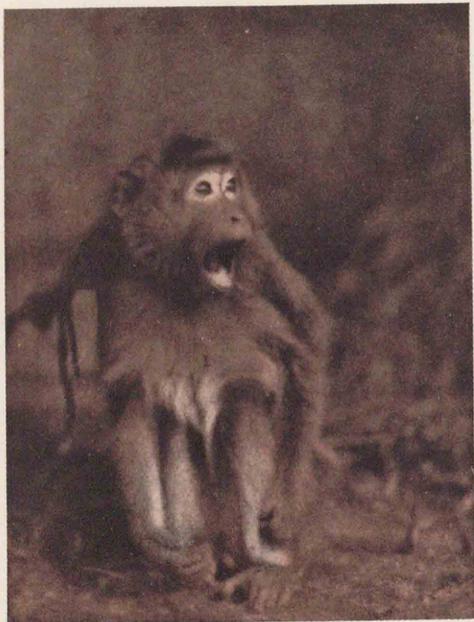
猿ごのの夜寒訪ひゆく兎かな

童話の世界である。猿ごのの呼んだのも面白い。又、猿ごのの夜寒と續けたので、猿ごのが此の頃の夜寒を淋しがつてござらうと思ひやつた兎さんの心持が出るところに、此の

「大きくいひ表はした言葉の調子」

「無氣味な感じ」

「童話の世界」



猿殿の夜寒訪ひゆく兎かな

燕村

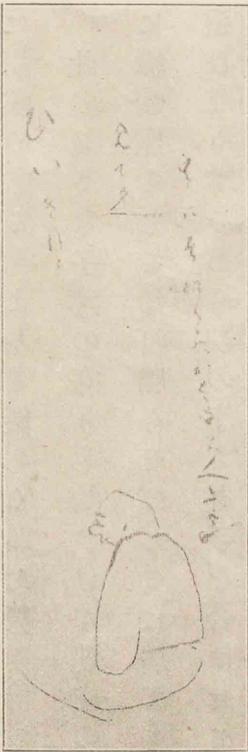
句が生きる。若し、猿さるのを兔うさぎが訪へる夜寒かなこしたらば、
 ずつとつまらない句になる。かうした處に此の句の苦心が
 あり、蕪村の上手さがある。言葉が藝術的に生かされるとい
 ふ妙諦みょうていもこゝにあるのである。(萩原井泉水の文による)

あら海や佐渡に横たふ天の川 芭蕉
 枯枝に鳥のとまりけり秋の暮 同
 大原や蝶の出で舞ふおぼる月 丈草
 應々といへど叩くや雪の門 去來
 鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春 共角
 黄菊白菊その外の名は無くもがな 嵐雪
 春の海ひねもすのたりくかな 蕪村
 鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな 同

妙諦 萩原井泉水 俳人。名は藤吉。明治十七年東京市に生まる。東京帝國大學國文科の出身。
 丈草 俳人。名は内藤林右衛門。尾張國犬山の人。芭蕉の門人。寶永元(二二六四)年歿す。年四十二。
 去來 俳人。名は向井平次郎。京都に住む。芭蕉の門人。寶永元年歿す。年六十二。
 其角 俳人。名は榎本源助。江戸に住む。芭蕉の門人。寶永四(二二六七)年歿す。年四十七。
 嵐雪 俳人。名は服部彦兵衛。江戸に住む。芭蕉の門人。寶永四年歿す。年五十四。
 蕪村 今の京都府紀伊郡上鳥羽村にありし離宮。

の丈になして踊らせて見たらんには興あるわざならんこ
我が身に積る老を忘れて憂さをなん晴しける。

かく日すがら牡鹿の角の束の間も手足を動かさずこい
ふことなくて遊び疲るゝものから朝は日のたくるまで眠



小林茶一筆蹟

其の内ば
かり母は正
月ご思ひ飯
炊ぎそこら

日すがら
牡鹿の角の束

ひいき目に見てさへ寒い
そぶりかな
おれが姿にいふ人も
一茶
「其の内ばかり、母は正
月ご思ひ」

掃き片付けて團扇ひらく汗をさまして閨に泣聲のする
を目の覺むる合圖ご定め手かしこく抱き起して乳房あて
がへばすはく吸ひながら胸のあたりを打叩きてにこに
こ笑ひ顔を作るに母は日々の襦袢の穢らはしきもほこほ

と忘れて衣のうらの玉を得たるやうに撫でさすりて、一し
ほ喜ぶ有様なりけらし。

蚤の迹數へながらに添乳かな

樂み極まりて愁起るは浮世の慣なれどまだ樂みも半ば
ならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみどり
ごを寐耳に水の押來る如きあらしくしき痘の神に見込ま
れつゝ今水膿のさなかなればやをら咲ける初花の泥雨に
しほれたるに等しく側へに見る目さへ苦しげにぞありけ
る。これも二三日経たれば痘はかせぐちにて雪解の峽土の
ほろく落つるやうに瘡蓋ごいふもの取るれば祝ひ囃し
てさんだら法師ごいふを作りて笹湯浴びする眞似かたし

「衣のうらの玉を得たる
やうに撫でさすり」

「笑ひ盛りなるみどり
ご」

痘の神
水膿

かせぐち

いままはらけい
ゆんせし
かつたこと
のうらとわか
いふわの
やうに

て、神は送り出したれど、ますく弱りて、昨日より今日は頼み少く、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、この世をしほみぬ。母は死顔にすがりて、よき泣くもむべなるかな。この期に及んでは、逝く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなど、あきらめ顔しても、思ひ切りがたきは恩愛のきづななりけり。

露の世は露の世ながらさりながら

(小林一茶「おらが春」)

名月や膳へ這ひよる子があらば
すぶ濡れの名を見ぬ炬燵かな
やせ蛙まけるな一茶これにあり

一茶

「朝顔の花と共に」

「思ひ切りがたきは」
きづな

小林一茶 俳人。名は彌太郎。俳諧寺と號す。文政十(二四八七)年歿す。年六十五。

一四 雪前雪後

雨も好し。露も好し。霰も霽も天より降るものの面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。
降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風無き寒さに、雀ふくらむほごは兎もあれ角もあれ、そこおろす風に連れて、ちらく、と降出づる始より、檐の玉水日に、耀ふ光長閑に融け盡くす終まで、いづれかをかしからざらん。先づ冬の雪の粉の如く、球の如く、笹の葉に、冴ゆる音立て、檜の葉に、堅き音立て、板底にはいたく跳ね返りなごしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。
又春の雪の大きく、軽らかに降りて、落つる頓て色無き水

「雪はまた特にめでたし」

耀ふ

の昔に返る淡々しさも懐かしく消ゆる消ゆるも少しは積りて茅葺の屋根に鹿の子斑の夏の富士を見せ松柳樅などの梢には天華俄に落ちかゝるか疑はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の見て美しきは冬の末掛けて春の



幸田露伴

初頃陽氣既に動きて陰氣猶いこ盛んなる時のことなり寒さ甚しからねば雪細かならず暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く且大きく且軽やかなるに而も一年の中最も降るべき折なれば其の霏々紛々として盛んに下るに當つては櫻花の春風に翻るが如く蘆絮の秋風に漂ふが如く一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹渺を欺き半衢の陋街には、連

「見て美しきは」
天華

蘆絮 野渡 仙境 縹渺 半衢

屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨を疑はしむ鶴毛亂れ飛び鷺毳飄り零つる景色見る眼もあやに美しき限なり。

すべて降る時の眺には、廣き處より狭き處好し玉屑珠塵いと清きことは清けれどもも色を奪ひ光を障ふるものなれば降りしきる真中は遠きは全く見えずして却つて狭くなり近きは聊か霞みて狭きは却つて廣くなり大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

晴れての後こそ雪は目ざましけれ塵埃拭ひ盡くして鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に渣滓鍊去つて銀曇無き地の皎々白きが見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに、面白く思はる馬をさへ眺むる人の言ひた

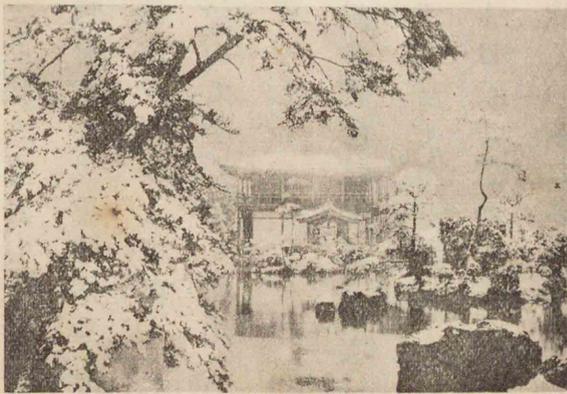
「廣き處より狭き處好し」
瓊瑤 蜃樓 巍峨 鷺毳

「晴れての後」

渣滓 是ゆく
馬をさへ眺む 芭蕉の句に「馬をさへ眺むる雪のあしたかな」

る旦朝日の光いと華やかなるに疎林に禽起つて飛んで又還る有りふれたる郊外のさまながらよし。

西の京は金閣銀閣眞如堂岡崎東山清水皆盡さすべし榊尾榊尾は見ねば知らぬぞ口惜しき木曾の寢覺の床の巖は鬼斧に任せて千古冷やかに峙ち潭は藍靛を湛へて一脈徐ろに流るゝ雪の日の凍れる寂しさに翠蓋稍重く壁の簷を戴ける松の村立のあたり姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんど二十年の昔の今も猶わが胸



雪の金閣寺

「西の京」

金閣 京都市上京區にある鹿苑寺の別稱。
銀閣 同左京區にある慈照寺の別稱。
眞如堂 同左京區にある天台宗の寺。
岡崎 同左京區にある東本願寺の別院。
榊尾 トガノヲ。京都市の北郊にある山。高尾・榊尾と連なり、三尾の名あり。
寢覺の床 長野縣西筑摩郡上松町にある名勝。
藍靛

に鮮かなり。

東の京は御濠の水おだやかに浮寝の禽の夢も安けく雪に閑かなる大御代の午また比ひ無くめでたし。山王臺今猶好からんが溜池の有りし昔徒に懐かし。不忍の池一望千頃の景は言はずもあれ石橋のさゝやかなるを渡つて湖心に至らんとすれば敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゞめきを聞きたる水に色無く聲に白さ有りこや言ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり臺より望みたるも好し。一條の碧四方の白實に武藏野を分きて流るゝ川なりと稱ふべし。相生橋の橋長く中島の島小なる取出でて言ふべきにはあらねども南に涯無き

「東の京」

山王臺 京都市麴町區。官幣大社日枝神社あり。
溜池 山王臺下にある池。今地名にのみ殘る。
不忍の池 下谷區。敗荷

待乳山 淺草區。隅田川に臨む小丘。
相生橋 深川區越中島町より京橋區月島に架したる橋。隅田川の河口。中央に中島あり。

海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて、一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。(幸田露伴「洗心録」)

銀砂を散らすやうに、玉屑を降らすやうに見てゐる中に、乾坤すべて一白、秀麗な山川を埋める變化の奇觀は、芭蕉翁でなくとも

いざさらば雪見に轉ぶところまでの感を起す。さはいへ、

駒とめて袖打拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ

には寂しい感がある。雪の風流は冷たいものである。川柳子には雪見にはばかと氣の附くところまでといつた。(芳賀矢一の文による)

「此處をこそ」
幸田露伴 文學博士。名は成行。慶應三(二五二七)年江戸に生まる。曾て京都帝國大學文學部講師たり。

駒止めての歌 新古今集卷六冬の部に見ゆる藤原定家の歌。

一五 樹の根

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかはあまり考へて見た事がなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな緑の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつこりと落ちついた潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を増して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が樹の色や光の内に漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節可愛い小鳥の群が活きくした聲で囀り交はして、緑の葉の間を

「永い馴染である松の樹の全體」

潤ひ——うるほひ

囀り——さへづり

樂しさうに往來する。それが私の親しい松の樹であつた。然るに或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる處に佇んで、砂の中に喰込んだ複雑な根を見ることが出来た。地上と地下との姿が何と甚しく相違してゐることであらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、それに比べて地下の根は、戦ひもがき、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髪カミの如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかしそれを目の前にまざく、こ見たときには、思はず驚異の情に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間

「地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる」

「地下の苦み」

に、このやうな地下の苦みが不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しさをうな顔を見たのは、濕りのない炎熱エンネツの日が一月以上も續いた後であつた。しかしその叫び聲や萎れた顔も、その機會さへ過ぐれば、すぐに元の快活に歸つて、苦みの痕を滅多に残さない。而も彼等は、我々の眼に祕められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな勞苦の上にもみ可能なのであつた。

「地下の營」

此の時以來私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親みを感じずるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐ

るのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

* * * * *

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜から、何とも云へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。此の地を選んだ弘法大師の見識にもつくづく敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて、平野から切離された急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか分らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほど、ごつしりとした、迷の無い、壯大な力強さを以て、天を目指して直立し

高野山 和歌山縣伊都郡の南部にある山。僧空海、此の地に金剛峯寺を創む。

「莊嚴な心持」

弘法大師 僧空海の諱。眞言宗の祖。俗姓は佐伯氏。讚岐國の人。唐の長安に留學し、歸朝後高野山に登りて金剛峯寺を創設す。能書の譽高く我國三筆の一人と稱せらる。承和二(一四九五)年寂す。年六十二。

金剛不壞

てゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひたひたに人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向かつた。地下の烈しい營は既に地上一尺の處に明かに現れてゐる。土の層の深くないらしい此の山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い強靱な根は力かぎり四方へ擴つて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體ごんなになつてゐるだらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雑に絡み合つてゐる有様は、想像するだけでも我々に驚異の情を起させる。確に山は烈しい生の力の營によつて、殘る所なく包まれ

「底力のある興奮」

てゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出来なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出来た。隠れたる努力の威壓が神祕の影をさへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營に没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くはない。

* * * * *

成長を欲するものは先づ根を確におろさなくてはならぬ。

上に延びる事をのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

「一種の靈氣」

「根の浅い自分」

早年にして成長のこまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下に喰入る事に没頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のよい頭と、感激の強い心臓と、能く立つ筆さを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしな人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒せられて、自分のやうなものは生きる値うちもないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現せられた時に、ごのやうな飛躍が彼の上に起るか。——私は彼の

前途を信じてゐる。根の確な人から貧弱な果實が生まれる筈はない。

* * * * *

古來の偉人には雄大な根の營があつた。それ故に、彼等の仕事は味はふほど深い味を示してくる。

現代にはたこへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ごもすれば、それが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍らしい變種が出来るだらうか。こか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうか。こか、すべてがあまりに人工的である。限られた土壤の中で、繊細に發達した根は深い大地に移されても、自由^よに其の手足を伸ばすこが出来ない。

「根の確な人から貧弱な果實が生まれる筈はない。」

「雄大な根の營」

天を衝かうこするやうな大きな願望^{がんぼう}は、いぢけた根からは生まれる筈がない。

偉大な物に對する崇敬は、また偉大なる根に對する崇敬であるこを考へて見なければならぬ。

* * * * *

根のためには、出来るならば地の質を選ばなくてはならぬ。

果實のためには、出来るならば、根を培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。

教養は培養である。それが有効であるためには、先づ生活の大地に喰入らうこする根がなくてはならぬ。汝の根に注意を集めよ。(和辻哲郎「偶像再興」)

「偉大なる根に對する崇敬」

「汝の根に注意を集めよ」

和辻哲郎 批評家。明治二十二年兵庫縣に生まる。東京帝國大學哲學科の出身。現に京都帝國大學助教たり。

一六 日蓮上人



高山樗牛

日蓮上人は、其の人物に於ても、其の事業に於ても、眞に偉大と稱せらるべき人であつた。先づ其の事蹟を考へて見るに、上人は安房の一漁師の子に生まれ、幼より出家して清澄に上り、後、叡山に學び、十二年の遊學の後、當時行はれた佛教諸宗門が何れも教祖なる釋迦の意に違つてゐることを悟り、故山に歸つて、初めて法華の新門を開いたが、聞くものは皆これを狂として取合はず、却つて在來の宗門を罵詈したのを怒つて、上人を殺さうとしたものさへあつた。そこで上人は去つて鎌

日蓮 日蓮宗の祖。漁師貫名重忠の第二子。安房國に生まる。「安國論」を著して諸宗を非難攻撃し、ためにあらゆる迫害を受けたれど、身を以て法華經の弘通に努む。弘安五（一九四二）年寂す。年六十一。
「其の人物に於ても、其の事業に於ても」
清澄 千葉縣安房郡清澄山。海拔三八三米。

倉に至り、淨土や禪の全盛を極めつゝある此の大覇府の大^{ウツ}道に立つて、念佛者は無間地獄に墮ちるであらう。禪は天魔の業ぞ。と大呼した。其のために、執權北條氏の怒に觸れて、一度は伊豆に流され、一度は佐渡に流され、其の間、或は暴民に庵室を焼かれ、或は龍の口に斬られようとし、或は敵人に要撃せられて命を落さうとし、その他、刀杖瓦石の災難は數を知らず、前後凡そ二十二年の間、席^{セキ}煖^{ヌル}る^マ違^ヒもなく、生^{ナマ}疵^キが身に絶えなかつたこの事である。

諸君よ、上人の受けた迫害は實に慘酷極つたものであつた。そして其の時間も、一年ならず、二年ならず、三五年乃至十年ならず、實に二十二年の長い間であつた。上人は此の長い長い二十二年の間、絶えず自己の信じた眞理を飽くまで宣

淨土 淨土宗。僧源空の開きたる一宗。
禪 禪宗。僧榮西・道元等の支那より傳へたる一宗。
念佛者 淨土宗を信ずるもの。
無間地獄 天覺
龍の口 タツのクチ。神奈川縣鎌倉郡鎌倉附近。鎌倉時代に刑場のありし處。
要撃

「實に二十二年の長い間」

傳し、生死の間に出入して、泰然として動かなく、常に此の臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ、糞を米に換ふるなり。云ひ、假令日本國の位を以て誘ふとも、父母の頸を切らんと脅すとも、我は決して是の眞理をば捨てじ。其の外の大難、風の前の塵たるべし。云ひ、宣言して、何の恐る、所もなく、憚る所もなく、聲の根の枯れざるかぎり、筆の毛の續かんかぎり、正々堂々と天下に呼號した。法然上人や親鸞上人のやうに、朝家權門に知己があるのでも無く、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧俗を敵として折伏の法鼓を鳴らし、時の執權たる北條氏を逆賊と呼はり、僅の小島の主と卑しむ。諸大寺の寺塔をば焼拂ひて、彼等の頭を由井が濱にて斬らずんば、日本國必ず亡ぶべし。云ひ、極言して、一世の耳

「砂を黄金に換へ、糞を米に換ふるなり」
假令——たゞし。

法然 ホフネン。源空のこ。美作國の人。淨土宗の開祖。建曆二(一八七二)年寂す。年八十。
親鸞 シンラン。法然の弟子。京都の人。淨土眞宗の開祖。弘長二(一九二二)年寂す。年九十。
折伏 由井が濱 鎌倉南方の海岸。

目を警醒した。其の態度の雄々しさ男らしさは、實に我が邦

立正安國論

振客來嘆曰自近年至近日天變地災飢饉疫癘遍滿天下廣道地上牛馬驚走若此者既超大半不悲之族敢死一人然間或專利劍即是之文唱西土教主之名或持衆病悉除之願誦東方如來之經或仰病即消滅不老不死之詞崇法華眞實之妙文或信七難即滅七福神生之句調百座百講之儀有因秘密眞言之教灑五瓶之水有全坐禪入定之儀澄空觀之月若書七鬼神之號

教は漸く都鄙に擴り、俗人の歸依したのは云ふまでも無く、

「一義を執つて十年を踰ゆるものは必ず眞面目なり」

立正安國論 旅客來嘆曰自近年至近日天變地災飢饉疫癘遍滿天下廣道地上牛馬驚走若此者既超大半不悲之族敢死一人然間或專利劍即是之文唱西土教主之名或持衆病悉除之願誦東方如來之經或仰病即消滅不老不死之詞崇法華眞實之妙文或信七難即滅七福神生之句調百座百講之儀有因秘密眞言之教灑五瓶之水有全坐禪入定之儀澄空觀之月若書七鬼神之號

淨土禪等の僧侶までも追々に改宗して、念佛の代りに唱題の響がだん／＼と高くなつたのである。北條より足利の時代になつてからは、此の宗門の勢は益々盛大となり、戰國時代にあつては、天下の寺院の中で法華が其の半ばを占めたところである。然るに後年に至つて、色々の事情から追々衰微して、今日では眞宗の全盛に壓倒せられてしまつたけれども、尙堂々として日本國の大宗門たることを失はぬ。これ皆上人の遺業の餘澤である。

餘澤

さて、上人の人物は如何であつたか云ふに、決して世人の多く信ずるやうな強情我慢一方の人では無かつた。諸大寺の寺塔をば焼拂ひて、彼等の頭を由井が濱にて斬らずんば、日本國必ず亡ぶべし。など痛言せられたあたりは、實に辛

「強情我慢一方の人では無かつた」

辛辣

辣激越の極みではあるが、其の裏面に温潤玉の如き愛情の、春の泉のやうに溢れて居つたことは、御書を読んだ人、讀んで解し得た人の必ず認める所であらう。女性に對しては常に深切を極められ、夫婦の愛情に對しても常に深厚な同情を寄せられた。又孝順の情に至つては、實に後人を感動せしむるに足る美蹟を遺された。即ち六十近き老境に到りながら、なほ父母を懷慕するの情に堪へず、身延山に引籠つてからも、毎日五十餘町もある險山を攀登つて、遙かに生國房州の空を拜まれたと云ふが如きは、實に孝行の鑑と稱すべきではないか。これが一日二日や一月二月の事ではない。雨の日も、雪の日も、九年の長い間、一日も缺かさなかつたと云ふに至つては、眞に驚歎の外は無いか。かう云ふ慈悲

激越

御書 日蓮の遺著。

「孝順の情に至つては」

身延山 山梨縣南巨摩郡。今久遠寺あり。

「九年の長い間」

愛情の話が、上人の生涯には外にも甚だ多いのである。

世人が折伏の側の上人を見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。されば史傳の中にも、一たび上人を拜したばかりで其の慈光に射られて、其のまゝ、歸依したと云ふやうな話が數々出て居る。要するに、上人は其の知識に於ては、當時の如何なる碩學にも匹敵し得べき深大なる素養を有し、其の意力に於ては、生死を顧みずして己の所念所志を貫徹するの大勇猛心を有し、又其の感情に於ては、溫潤閑雅、所謂大丈夫の俠骨は、婦女子の柔腸を妨げざる底の人情を有せられたのである。
(高山樗牛「樗牛全集」)

「知識に於ては」

「意力に於ては」

「感情に於ては」

俠骨
柔腸
高山樗牛 文學博士。名は林次郎。山形縣に生まる。東京帝國大學哲學科の出身。明治三十五年歿す。年三十二。

一七 神國



徳富猪一郎

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此のこゝあり。異國には其の類無し。此の故に神國といふなり。」とは、北畠親房の神皇正統記の開卷第一に特筆大書したる文字なり。今や我が日の神の御子は、天壤と共に萬世一系窮りなき寶祚を嗣がせ給ふ。吾人草莽の小民、恭しく茲に忠良なる帝國臣民の至情と赤心とを披瀝して、一片の頌辭を奉る。
謹んで按ずるに、皇室典範第十條に曰く、

「大日本は神國なり」
日神 天照大神を申し奉る。
北畠親房 吉野朝の忠臣。足利尊氏の叛するや首として吉野朝のため、に劃策し、正平九(二〇一四)年賀名生に薨す。年六十三。
神皇正統記 一卷。親房の著。神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたり。
天壤と共に 日本書紀卷十七に「豊葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與天壤無窮者矣」
頌辭

皇位の御守
昭乎
宣命
天資
庶政
百揆

天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク
神器とは鏡・劍・璽の三種の神器を云ふ。此の神器の皇位の
御守たることは、國史の上に昭乎として天日の如く瞭かな
り。蓋し天子の位、一日も曠しくすべからずは、歴世の宣命
にも明記せられたる所なり。國家の變故に際する毎に、帝國
の舊章・古典は、恒に吾人の指導者たり。今や親しく其の實物
教訓に接す。吾人臣民は自ら顧みて、悠久なる歴史を持つ日
本帝國の臣民たることを、無上の幸運にして且光榮たりこ
感激す。

恭しく惟みるに、今上天皇陛下には、天資聰明、仁孝の徳、蚤
に天下に治し、攝政として先帝に代り、庶政を總べ、百揆を攬
り、其の御經驗や頗る多大なり、而して皇太子として世界を

天資
庶政
百揆

周遊あらせられたる如きは、國史上未曾有のここたり。吾人
臣民は、洵に陛下の統治の下に、其の生を享け、其の事に就き、
其の志を遂げ、其の務を果すことを得るを以て、比類なき福
祉とし、冥加と感佩す。

「比類なき福祉」

皇政維新の大改革以來、既に六十年を經過し、而して帝國
の國運は、世界の變遷と與に勢ひ變遷せざるを得ざるもの
あり。特に世界大戰以來、世界に於ける無比の大國たる露、無
比の強國たる獨、無比の舊國たる奥の三大帝國は、其の國命
を革め、而して其の以前、東洋に於ける一大帝國たりし清國
も亦宣統帝位を去りて、中華民國となりぬ。今や世界の中に
於て、帝國の名實兩つながら全くして、巍然として列國の表
に聳立するものは、東洋に於て大日本帝國あり、西洋に於て

國命を革め

宣統帝 清朝最後の天
子。醇親王の子。西紀
一九一二年退位す。
「帝國の名實兩つながら
全くして、巍然として列
國の表に聳立するもの」

平約の

稍、これに庶幾きもの、大英帝國あるのみ。

世界大戰の結果は、從來把持したる國際政局の平衡を打破して、未だ整一せる新局面を開展せず。一天四海看來れば、大風雨大洪水の後たらずんば、大火事の後たり。爾來各國攷致として善後の施設に努む。雖も、其の復興は容易ならず。此の間に介在して善處せんことを。我が大日本帝國の前途も亦難いかな。

而も其の紛淆は、單に形而下の事のみならず。今日は世界に於ける思想上の一大混亂期にして、我が日本帝國も亦其の驚波駭浪の中に立てり。物質的の鎖國の不可能なる如く、思想上の鎖國は、猶更不可能とする所にして、此の一大混亂期に際する吾人の覺悟としては、徒に外來の惡思想、惡傾向

「未だ整一せる新局面を開展せず」

形而下

「思想上の一大混亂期」

そのなみの
中
ある

あなうしは
やうな

こうして

を防止するにあらずして、我自ら我が固有の本領を發揮せざるべからざるにあり。所謂彼の惡を禁ずるにあらずして、我の善を奨むるにあらずんばあるべからず。而して其の善思想、善傾向の泉源は、主として我が國民の中樞たる皇室にこれを求め、且これに則る事に力を致さざるべからず。我が國民の忠良なることは、國史の證明する所なり。而もこれ國民が獨り自ら忠良なるにあらずして、我が皇室の恩徳、よく國民の思想を涵養し、育化し、其の性情を感發し、興起せしめて、こゝに至らしめたるなり。如何なる場合にも除外例はあり。若し仔細に國史を探求せんか、我が國民の少くとも或部分に於ては、其の忠良性を失墜したる場合、決して皆無にはあらず。一部の太平記を披

「善思想、善傾向の泉源」

涵養

こゝからいふの
もよしとして
まわす

きても如何に我が國民の或者が脱線的言動を逞しうしたりしかを知るべし若し徒に國民の忠良性に依頼しこれを培育しこれを補充しこれを長養せしむる所以の道を竭さざるに於ては其の極或は寒心すべき結果を來さずとも限られず此の一義は須臾も忘るべからざる要件にして殊に現今の世界思想混亂期に於て最も然りとす。

今日は國家多難の秋なり如何に壯言美辭を以て泰平を謳歌せんとするも我が帝國が世界的大波瀾の洶涌中に掀翻せられつゝある實狀を看過する能はず吾人臣民はかゝる多難の時に際し至尊の御新政を創始せられ給ふにつきて深く宸慮を惱まさせ給ふを拜察し奉らざるを得ざるなり而も我が國民は悉く皇室中心主義者にして至尊の御導

「國家多難の秋」

洶涌
掀翻

うらやま
おぼやかし

きには智愚賢不肖を問はず皆獎勵せざる者なし今日の急務はたゞ至尊の乾徳天の如き籠を垂れ給うて我が臣民を御指導あらせ給ふ一事に存す而してこれ實に明治天皇の振古未曾有の皇運を恢弘あらせ給ひたる所以なりしなり。恐れながら新政の典型は一にこれに基づかざるべからず。抑神武天皇の業を創め給ふや六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩うて而して宇を爲すの大規模を建てさせ給ひぬ。明治天皇の御代を知ろしめすや首めに五條の誓文を立て給ひ、

「新政の典型」

振古
恢弘

六合

八紘
宇

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ 朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

ご宣へり而して天皇は實に其の御言葉の如く行はせ給ひぬ。否御言葉以上に行はせ給ひぬ。

日本帝國臣民の尊皇心は明治の御代殊に其の末期に至りて最も深厚熱烈に發揮せられたり而してこれ國民の忠良心が偶然に勃興し一時に突發したるにあらざして實に我が明治天皇の盛徳國民を感化し知らず覺えずこゝに至らしめたるものなりしなり。次いで大正の御代は實に其の聖澤の中より出で先帝よくこれを守らせ給ひしによりて彌隆運を成ししものと信ず。

草莽の微臣此の國家の大事に際し感迫り情熱し自ら裁する所以を知らずたゞ恭しく滿腔の赤誠を披瀝して天つ日嗣たる今上天皇陛下の萬歳を頌し奉るのみ而してこれ

「御言葉以上に」

「今上天皇陛下の萬歳を頌し奉る」

實に我が帝國の忠良なる臣民の心底より出でたる至誠の祈願なり。(徳富猪一郎の文による)

愛國心といつてもたゞ盲目的に國を愛するのではない。各國民はその國家に就いてそれ／＼自覺するところがなければならぬ。それ故に我々日本人は此の愛國心を全うするために立國の大義を明かにし國體の特徴を辨へ而して國體の精華を永遠に發揮する事に努めねばならぬ。我々日本人は此の日本と云ふ國家を離れ日本の國史を離れては日本人たるの意味をなすことは出来ない。我が國が君主國體として萬世一系の天皇を戴き奉り血族親愛の關係に於て萬國無比の國を成せることは我々國民の光榮であつて此の天壤無窮の國運を扶翼することは實に我々臣民の本分であり且又我々の祖先の遺風を顯彰する所以である。(大島正徳の文による)

徳富猪一郎 評論家。蘇峯と號す。文久三(一八五二)年熊本に生まる。同志社の出身。現に貴族院議員たり。

大島正徳 倫理學者。明治十三年神奈川縣に生まる。東京帝國大學哲學科の出身。現に同大學講師たり。

一八 誠の説

一勺の水を海に入れて、海の水増したりといはんは愚なり。増さずといふも妄なり。水を加ふる所は我にして、増さざるは我にあらざるものは強ひて其の辨を求めずして可なり。我にある所の誠を盡くす、これ君子の道なり。誠は虚言を言はざる事このみ心得たらんは、愚なることなり。或人、司馬温公に誠に入る道を問ひければ、妄語せざるより入る。ごぞ答へける。げに妄りに語らず、虚言を言はぬより、誠の道には入るなれども、虚言を言はぬを誠は言はぬなり。偽を言はぬに對する信は小さし。偽なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至つて小さきものな

妄

「我にある所の誠を盡くす、これ君子の道なり」

司馬温公 名は光。支那宋代の政治家・學者。(西紀一〇〇九—一〇八年六)
或人云々 宋鑑に「劉安世問光一言可_レ以終身行之者光曰其誠乎。安世問其所_レ從入。曰自_レ不_レ妄語入。」

り。地に落さば目にもかゝらぬやうなれども、内に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隠すべからず、味ますべからず、覆ふべからず。其の時至るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。其の子を水に腐らし、火に焼きて芽を出さずといふは、その子の咎ならんや。是によりて物の子を實といふ。實は即ち誠なり。少しにても誠ならざるもの交りて、腐りたるものは芽生ぜず、痛みたるは瘁^{かぢ}く。人の誠も猶此の如し。
昔、衛の靈公といひし君、夜、夫人と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり。靈公、誰なるべきか。と夫人に問ひ給ひければ、是は蘧伯玉なるべし。禮に「下_レ公門_レ式路馬_レ」といふことあり。忠臣

「内に一つの誠といふものありて」

瘁^{かぢ}く
衛の靈公 支那春秋時代に於ける衛の君。名は元。西紀前四九三年卒す。此の話は小學の内篇に見ゆ。
蘧伯玉 名は瑗。衛の賢大夫たり。
禮 禮記。四十九篇。五經の一。支那古代の禮書。その曲禮第一に曰く、「大夫士下_レ公門_レ式路馬_レ」

孝子、不爲昭々、信節、不爲冥々、惰行。いへり。蘧伯玉は衛の賢人なり。夜なればこて禮をば廢せじ。こいひけり。靈公、人を遣して見しめけるに、果して伯玉にてぞありける。
人知るまじこて欺くは妄なり。四知こいひて、人知らずこ思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る。いかでか掩ひかくすべき。たこへば一升の米、日々に二三十粒を取らんこも、措かんこも、知れざるべし。然れども久しく措く時は増し、取る時は減る。草木も、朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬやうなれども、誠こいふものは少しも間斷なきゆゑに、いつ太るこもなければ、次第に太るものなり。
人の見ぬ間こて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びも

「人知るまじこて欺くは妄なり」
四知 後漢の楊震の言。

すまじ。深き谷の蘭も遙かなる山の紅葉も、人なしこてもよく薫り、美しく照ればこそ、人至りたる時も香清く色麗しけれ。人の至るを待ちて香を放ち色を出さんこせば、筈にあふここあるべからず。常々心に掛けて掃灑したらん座席こ、俄に蜘蛛の絲取り柱拭きたらんこは、いかでか見紛ふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み偽り、文らんは、誠の俄掃除なるべし。如見其肺肝。こて、人を欺くにあらず、たゞ我が心を欺くに過ぎざるなり。

筈にあふ

文る

「誠の俄掃除」
如見其肺肝。大學の傳に見えたる語。「人之視己如見其肺肝然。」

古人の歌 後選集卷十一に見えたる讀人知らずの歌。

○ 古人の歌に曰く、
なき名ぞこ人には言ひてありぬべし心の問はばい
かゞこたへん
(三浦梅園梅園叢書)

(三浦梅園梅園叢書)

一九 杜子春

一

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる一人の若者がありました。

若者は、名を杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ盡くして、その日の暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。

何しろ、その頃洛陽といへば、天下に並ぶものもない繁昌を極めた都ですから、往來にはまだしつきりなく人や車が通つてゐました。門一はいに當つてゐる油のやうな夕日の

「春の日暮」

洛陽 支那河南省河南府
洛陽縣の東北二十清里。

「一人の若者」

光の中に、老人のかぶつた紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾つた色絲の手綱が、絶えず流れて行く様子は、まるで晝のやうな美しさです。

しかし杜子春は、相變らず門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。空にはもう細い月が、うらく、こ靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思ふほどかすかに白く浮かんでゐるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行つても泊めてくれる處はなささうだし、——こんな思をして生きてゐる位なら、いつそ川へでも身を投げて死んでしまつた方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りこめもないこと

「空にはもう細い月が」

「取りこめのないことを」

を思ひめぐらしてゐたのです。

すると何處からやつて來たか、突然彼の前へ足を止めた片眇かたすけめの老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、びつと杜子春の顔を見ながら、

「片眇の老人」

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、横柄に言葉をかけました。「私ですか。私は今夜寝る處もないので、どうしたものか考へてゐるのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。」

老人は暫く何事か考へてゐるやうでしたが、やがて往來にさしてゐる夕日の光を指しながら、

「夕日の光を指しながら」

「では、おれが好いことを、一つ教へてやらう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に當る處を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一はい黄金が埋つてゐる筈だから。」

「ほんたうですか。」

杜子春は驚いて、伏せてゐた眼を舉げました。ところが更に不思議なことには、あの老人は何處へ行つたか、もうあたりにはそれらしい影も形も見當りません。その代り、空の月の色は前より猶白くなつて、休ない往來の人通りの上には、もう氣の早い蝙蝠が二三匹ひらく、舞つてゐました。

「月の色は前より猶白くなつて」

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人といふ大金持

「洛陽の都でも唯一人」

になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に當る處を夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも餘る位、黄金が一山出て來たのです。

杜子春は、すぐに立派な家を買つて、玄宗皇帝にも負けな位、贅澤な暮らしを始めました。蘭陵の酒を買はせるやら、桂州の龍眼肉を取寄せるやら、日に四度色の變る牡丹を庭に植ゑさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼するやら、玉を集めるやら、錦を織らせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂へるやら、その贅澤を一々書いてゐては、いつになつてもこの話がおしまひにならない位です。

するど、かういふ噂を聞いて、今までは途で行合つても挨拶さへしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやつて來まし

玄宗 唐の第六代の皇帝。名は隆基。睿宗の第三子。その在位期間は唐の極盛時代なり。(西紀七一三―七六二年)
蘭陵 ランリョウ。江蘇省常州府武進縣の地。美酒を産す。
桂州 廣西省桂林縣にあたる。
龍眼肉

「挨拶さへもしなかつた友だちなどが」

た。それも一日毎に數を増して、半年ばかり經つ内には、洛陽の都に名を知られた人たちで、杜子春の家へ來ないものは一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒宴を開きました。その酒宴の又盛んなことは、なかく、口には盡くされません。ごくかい摘まんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から來た葡萄酒を汲んで、天竺生れの魔法師が刀を呑んで見せる藝に見惚れてゐるど、そのまはりを樂人たちが笛や琴を節面白く奏してゐるどいふ景氣なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅澤家の杜子春も、一年二年と經つ内には、だんだん貧乏になり出しました。さうするど、人間は薄情なもので、

天竺 テンヂク。印度の古名。

昨日までは毎日來た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、
挨拶一つして行きません。まして、さうく三年目の春、又杜
子春が以前の通り一文無しになつて見ると、廣い洛陽の都
の中にも、彼に宿を貸さうといふ家は一軒もなくなつてし
まひました。いや、宿を貸す所か、今では椀に一杯の水も恵ん
でくれる者はないのです。

そこで、彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下
へ行つて、ぼんやり空を眺めながら途方に暮れて立つてゐ
ました。するさ、やはり昔のやうに片眇の老人が、ごこからか
姿を現して、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、聲をかけるではありませ
んか。

「昨日までは毎日來た友
だちも」

「或日の夕方」

「片眇の老人」

杜子春は老人の顔を見ると、恥づかしさうに下を向いた
ま、暫くは返事もしませんでしたが、老人はその日も深切
に同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じやうに、
「私は今夜寝る處もないので、どうしたものかと考へてゐ
るのです。」と、恐る／＼返事をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを一つ
教へてやらう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映
つたら、その胸に當る處を夜中に掘つて見るが好い。きつこ
車に一はいの黄金が埋つてゐる筈だから。」

老人はかう言つたと思ふと、今度も亦人ごみの中へ、搔消
すやうに隠れてしまひました。

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返りま

「恥づかしさうに」

「搔消すやうに」

した。と同時に、相變らず仕放題な贅澤をし始めました。庭に咲いてゐる牡丹の花、その中に眠つてゐる白孔雀、それから刀を呑んで見せる天竺から來た魔法使、——すべてが昔の通りなのです。

ですから、車に一はいあつた、あの夥しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなつてしまひました。

三

「お前は何を考へてゐるのだ。」

片眇の老人は三度杜子春の前へ來て、同じことを問ひかけました。勿論彼はその時も洛陽の西の門の下に、ほそくご霞を被つてゐる三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇んでゐたのです。

「仕放題な贅澤」

「片眇の老人」

「私ですか。私は今夜寝る處もないので、どうしようかと思つてゐるのです。」

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを教へてやらう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その腹に當る處を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一はいの——」

老人がこゝまで言ひかけると、杜子春は急に手を舉げて、その言葉を遮りました。

「いや、お金はもう入らないのです。」
「金はもう入らない？ は、あ、では贅澤をするのはさうさう飽きてしまつたと見えるな。」

老人はいぶかしさうな眼つきをしながら、ぢつと杜子春

「腹に當る處を」

「お金はもう入らないのです」

の顔を見つめました。

「なに、贅澤に飽きたのぢやありません。人間ごいふものに愛想が盡きたのです。」

杜子春は不平さうな顔をしながら、突慳貪にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が盡きたのだ。」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辭も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覽なさい。優しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たごひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな氣がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くに、急に笑ひ出しました。

「不平さうな顔をしながら」

「さうか。いや、お前は若い者に似合はず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか。」

杜子春はちよいとためらひました。すぐに思ひ切つた眼を擧げると、訴へるやうに老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になつて、仙術の修業をしたいと思ふのです。いゝえ、隠してはいけません。あなたは徳の高い仙人でせう。仙人でなければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教へて下さい。」

老人は眉をひそめたまゝ、暫く黙つて、何事か考へてゐる

「思ひ切つた眼を擧げると」

「眉をひそめたまゝ」

やうでしたが、やがて又につこり笑ひながら、
「いかにも、おれは峨眉山に棲んでゐる鐵冠子といふ仙人だ。初めお前の顔を見た時、ごか物のわかりが好ささうだつたから、二度まで大金持にしてやつたのだが、それほど仙人になりたければ、おれの弟子に取立ててやらう。」と、快く願を容れてくれました。

杜子春は喜んだの喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鐵冠子にお時儀をしました。

「いや、さう禮などは言つて貰ふまい。いくらおれの弟子にした所が、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第できまることだからな。が、兎も角もまづおれと一緒に峨眉山

峨眉山 ガピサン。四川省嘉定府峨眉縣に屬する山。靈地として仰がれ、支那三山のひとり。海拔約三三七〇米。

「お前次第できまることだからな」

の奥へ來て見るが好い。お、幸ひこゝに竹杖が一本落ちてゐる。では早速これへ乗つて、一飛びに空を渡るこしよう。

鐵冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げるこ、口の中に呪文を唱へながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るやうに跨がりました。するこ、不思議ではありませんか。竹杖は忽ち龍のやうに勢よく大空へ舞上がつて、晴渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

「晴渡つた春の夕空を」

杜子春は膽をつぶしながら、恐る／＼下を見おろしましたが、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、どうに霞んだのでせう、ごこを探しても見當りません。その内に鐵冠子は、白い鬚の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱ひ出しました。

朝に北海に遊び、暮には蒼梧。

袖裏の青蛇、膽氣粗なり。

三たび嶽陽に入れども、人識らず。

朗吟して飛過す、洞庭湖。

四

二人を載せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞下がりました。そこは深い谷に臨んだ、幅の廣い一枚岩の上でしたが、よく高い處だと思えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗ほどの大きさに光つてゐました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返つて、やつと耳に入るものは、後ろの絶壁に生えてゐる曲りくねつた一株の松が、轟々と夜風に鳴る音だけです。

朝に北海に云々 唐の詩人、呂洞賓の詩に、

過洞庭と題して、

朝遊北海暮蒼梧。

袖裏青蛇膽氣粗。

三入嶽陽人不識。

朗吟飛過洞庭湖。

北海 渤海をさす。

蒼梧 サウゴ。湖南省寧遠縣にあり。

青蛇 劍の名。

嶽陽 湖南省岳州巴陵縣にあり。

「間もなく峨眉山へ」

北斗 ホクト。北極星の近くにある星。北斗七星。

二人が岩の上へ來ると、鐵冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西王母にお目にかゝつて來るから、お前はその間こゝに坐つて、おれの歸るのを待つてゐるが好い。多分おれが居なくなるよ、いろくゝな魔性が現れて、お前をたぶらかさうとするだらうが、たごひごんなことが起らうとも、決して聲を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだぞ。覺悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙つてゐるのだぞ。」と言ひました。

「大丈夫です。決して聲などは出しません。命がなくなつても黙つてゐます。」

西王母 支那傳説中の仙女。

たぶらかす

「一言でも口を利いたら」

「命がなくなつても」

「さうか。それを聞いておれも安心した。ではおれは行つて来るから。」

老人は杜子春に別を告げると、又あの竹杖に跨がつて、夜目にも削つたやうに見える山々の空へ、一文字に消えてしまひました。

杜子春はたつた一人、岩の上に坐つたまゝ、靜かに星を眺めてゐました。すると彼は半時ばかり経つて、深山の夜氣が肌寒く薄い着物に透り出した頃、突然空中に聲があつて、

「そこにあるのは何物だ。」と叱りつけるではありませんか。しかし杜子春は仙人の教通り、返事をせずにあつて、

所が、又暫くすると、やはり同じ聲が響いて、
「返事をしないと、立處に命はないものと覺悟をしろ。」とい

「たつた一人」

「立處に命はないものと」

かめしく嚇しつけるのです。

杜子春は勿論黙つてゐました。

「ここから登つて來たか爛々」と眼を光らせた虎が一匹、

「虎が一匹」

忽然と岩の上に躍り上がつて、杜子春の姿を睨みながら、一聲高く哮りました。のみならず、又それと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわ／＼揺れたと思ふと、後ろの絶壁の頂からは、四斗樽ほどの白蛇が一匹、炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへおりて來るのです。

「白蛇が一匹」

杜子春は、しかし平然と眉も動かさずに坐つてゐました。虎と蛇とは、一つ餌食を狙つて、互に隙でも窺ふのか、暫くは睨み合ひの體でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が、虎の牙に噛まれるか、蛇の

「一時に」

舌に呑まれるか、杜子春の命は瞬く内になくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く夜風と共に消失せて、後には唯絶壁の松が、さつきの通り轟々と枝を鳴らしてゐるばかりなのです。杜子春はほつと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待つてゐました。

「さつきの通り」

すると、一陣の風が吹起つて、墨のやうな黒雲が一面にあたりを鎖すや否や、薄紫の稻妻が、やにはに闇を二つに裂いて、凄じく雷が鳴りだしました。いや、雷ばかりではありません。それと一緒に、瀑のやうな雨も、いきなりごう／＼と降出したのです。杜子春は、この天變の中に怖れ氣もなく坐つてゐました。風の音、雨のしぶき、それから絶間ない稻妻の光、――暫くはさすがの峨眉山も覆るかと思ふ位でしたが、その

「やにはに闇を二つに裂く」

内に耳をもつんざくほど、大きな雷鳴が轟いたと思ふと、空に渦卷いた黒雲の中から、眞赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

「眞赤な一本の火柱」

杜子春は思はず耳を抑へて、一枚岩の上へひれ伏しましたが、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴渡つて、向に聳えた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いてゐます。して見れば、今の大暴風も、あの虎や白蛇と同じやうに、鐵冠子の留守をつけこんだ魔性の悪戯に違ありません。杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭ひながら、又岩の上に坐り直しました。

「やはりきら／＼輝いて」

が、その溜息がまだ消えない内に、今度は彼の坐つてゐる前へ、金の鎧を着た、身の丈三丈もあらうといふ、嚴かな神將

「溜息がまだ消えない内に」

神將

が現れました。神將は手に三叉の戟を持つてゐましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸元へ向けながら、眼を瞋らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一體何物だ。この峨眉山といふ山は、天地開闢の昔から、おれが住居をしてゐる處だぞ。それも憚らず、たつた一人こゝへ足を踏入れることは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ、命が惜しかつたら、一刻も早く返答しろ。」と言ふのです。

しかし杜子春は、老人の言葉の通り、默然と口を噤んでゐました。

「返事をしないか。——しないな。好し。しなければしないで勝手にしろ。その代りおれの眷屬たちが、その方をずたくく

「一刻も早く返答しろ」

「しないな。好し」

眷屬

に斬つてしまふぞ。」

神將は戟を高く舉げて、向の山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたここには、無数の神兵が雲の如く空に充ち満ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもこゝへ一なだれに攻寄せようとしてゐるのです。

この氣色を見た杜子春は、思はずあつと叫びさうにしましたが、すぐに又鐵冠子の言葉を思ひ出して、一所懸命に黙つてゐました。神將は彼が恐れぬのを見るに、怒つたの怒らないのではありません。

「この剛情者奴。どうしても返事をしなければ、約束通り命はこつてやるぞ。」

神將はかう喚くが早いのか、三叉の戟を閃かせて、一つきに

「闇がさつと裂けると」

「鐵冠子の言葉を思ひ出した」

「三叉の戟を閃かせて」

杜子春を突殺しました。さうして峨眉山もごよむほごからから高く笑ひながら、ごごもなく消えてしまひました。勿論この時は、もう無数の神兵も、吹渡る夜風の音と一緒に、夢のやうに消失した後だつたのです。

北斗の星は又寒さうに一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に變らず、轟々枝を鳴らしてゐますが、杜子春はさうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れてゐました。

五

杜子春の體は、岩の上に仰向けに倒れてゐましたが、魂は靜かに體から抜けだして、地獄の底へおりて行きました。

この世と地獄との間には、闇穴道といふ道があつて、そこは年中、暗い空に氷のやうな冷たい風がびゅう／＼吹荒ん

「寒さうに一枚岩の上を照らし始めました」

「魂は靜かに體から抜けだして」

闇穴道 アンケツダウ。罪人を地獄へ落すその途中の暗黒なる道。

でゐるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木の葉のやうに、空に漂つて行きましたが、やがて森羅殿といふ額の懸つた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにもそのまはりを取捲いて、階の前へ引据ゑました。階の上には一人の王様が、眞黒な袍きんぎょに金の冠をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでゐます。これは豫て噂に聞いた閻魔大王に違ありません。杜子春はさうなることかと思ひながら、恐る／＼そこに跪いてゐました。

「こら、その方は何のために峨眉山の上に坐つてゐたのか。」閻魔大王の聲は雷のやうに、階の上から響きました。杜子春は早速その間に答へようと思ひましたが、ふと又思ひ出し

「森羅殿」

「噂に聞いた閻魔大王」

たのは、決して口を利くな。さういふ鐵冠子の戒の言葉です。そこで唯頭を垂れたまゝ、啞のやうに黙つてゐました。すると、閻魔大王は持つてゐた鐵の笏を擧げて、顔中の髯を逆立てながら、

「その方はこゝをどこだと思ふ。速かに返答をすれば好し、さもなければ、時を移さず地獄の呵責に遇はせてくれるぞ。」と、威丈高に罵りました。

が、杜子春は相變らず唇一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言ひつける。鬼どもは一度に畏つて、忽ち杜子春を引立てながら、森羅殿の空へ舞上がりました。

地獄には、誰でも知つてゐる通り、劍の山や血の池の外に

「決して口を利くな」

「地獄の呵責」

カシコマコト

も、焦熱地獄といふ焰の谷や、極寒地獄といふ氷の海が、眞暗な空の下に並んでゐます。鬼どもはさういふ地獄の中へ、代る／＼杜子春を抛り込みました。ですから杜子春は、無残にも劍に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鐵の杵に搗かれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に腦味噌を吸はれるやら、熊鷹に眼を食はれるやら、――その苦みを數へ立ててゐては、到庭際限がない位、あらゆる責め苦に遇はされたのです。それでも杜子春は我慢強く、ちつと齒を食ひしばつたまゝ、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも呆れ返つてしまつたのでせう。もう一度夜のやうな空を飛んで、森羅殿の前へ來ると、さ

「あらゆる責め苦」

「鬼どもも呆れ返つて」

つきの通り杜子春を階の下に引据ゑながら御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても物を言ふ氣色がございません。」と、口を揃へて言上しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れてゐましたが、やがて何か思ひついたと見え、

「この男の父母は、畜生道に落ちてゐる筈だから、早速こゝへ引立てて來い。」と、一匹の鬼に言ひつけました。

鬼は忽ち風に乗つて地獄の空へ舞上がりました。と思ふと、又星が流れるやうに、二匹の獸を驅立てながら、さつと森

羅殿の前へおりて來ました。その獸を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといへば、それは、二匹

畜生道

「二匹の獸」

とも、形は見すばらしい瘦馬でしたが、顔は夢にも忘れない死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために峨眉山の上に坐つてゐたか、眞直ぐに白狀しなければ、今度はその方の父母に痛い思をさせてやるぞ。」

「父母に痛い思を」

杜子春はかう嚇されても、矢張返答をせずにおりました。

「この不孝者奴が、その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ好いと思つてゐるのだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れるほど、凄じい聲で喚きました。「打て、鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打碎いて了へ。」

「打て、鬼ども」

鬼どもは一齊に「はつ」と答へながら、鐵の鞭をこつて立上がるに、四方八方から二匹の馬を未練未釋なく打ちのめし

ました。鞭はりゆうくゝと風を切つて、處嫌はず雨のやうに馬の皮肉を打破るのです。馬は――畜生になつた父母は、苦しさうに身を悶えて、眼には血の涙を浮かべたまゝ、見てもゐられないほど嘶き立てました。

「どうだ、まだその方は白状しないか。」

閻魔大王は、鬼ごもに暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には、二匹の馬も、肉は裂け骨は碎けて、息も絶えぐゝに階の前に倒れ伏してゐたのです。

杜子春は必死になつて、鐵冠子の言葉を思ひ出しながら、かたく眼をつぶつてゐました。するどその時、彼の耳には、殆ど聲こはいへない位微かな聲が傳はつて來ました。

「まだ、その方は白状しないか」

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構な事はないのだから、大王が何と仰しやつても言ひたくない事は黙つておいで。」

それは確に懐かしい母親の聲に違ありません。杜子春は思はず眼をあげました。さうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまゝ、悲しさうに彼の顔へ、ぢつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦みの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼ごもの鞭に打たれたことを怨む氣色さへも見せないのです。大金持になれば御世辭を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べるご、何と云ふありがたい志でせう。何と云ふ**健氣**な決心でせう。杜子春は老人の戒も忘れて、轉ぶやうにその側へ走り寄るご、兩手に半死の馬の

「懐かしい母親の聲」

「ありがたい志」

頸を抱いて、はらくと涙を落しながら、「お母さん。」と一聲叫びました。……

六

その聲に氣がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下にぼんやり佇んでゐるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶間ない人や車の波——すべてがまだ峨眉山へ行かない前と同じことです。

「どうだな、おれの弟子になつた所が、ごとも仙人になればすまい。」

片眇の老人は微笑を含みながら言ひました。

「なれませんか——なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、却つて嬉しい氣がするのです。」

「お母さん。と一聲」

「やはり夕日を浴びて」

「片眇の老人」

「まだ眼に涙を浮かべたまゝ」

杜子春はまだ眼に涙を浮かべたまゝ、思はず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に鞭を受けてゐる父母を見ては、黙つてゐる譯には行きません。」

「もしお前が黙つてゐたら——」と鐵冠子は急に嚴かな顔になる。ちつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。——お前はもう仙人になりたいといふ望も持つてゐまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。では、お前はこれから後、何になつたら好いと思ふな。」

「何になつても、人間らしい、正直な暮しをする積りです。」
杜子春の聲には、今までにない晴れ／＼した調子が籠つてゐました。

「その言葉を忘れるなよ。では、おれは今日限り二度とお前には遇はないから。」

鐵冠子がかう言ふ内に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を止めて杜子春の方を振返ると、

「お、幸ひ今思ひ出したが、おれは泰山の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに桃の花が一面に咲いてゐるだらう。」と、さも愉快さうにつけ加へました。

（芥川龍之介「沙羅の花」）

「人間らしい、正直な暮し」

泰山 タイザン。山東省

泰安府泰安縣にあり。

支那五嶽の一。

「桃の花が一面に咲いてゐるだらう」

芥川龍之介 小説家。東

京市に生まる。東京帝國

大學英文科の出身。昭和

二年歿す。年三十六。

二〇 角笛の響

佛蘭西のアルプスの山へ行きますと、夕方など、霧のか、つて來る草原や、杉の森の中から、角笛の響が遠く近く聞えて來ます。谿を隔てて向の山から、その響が、林や、丘や、谷間に、透して、悲しく物寂しく、小暗くなつた小路の上に、微かにたゆたひます。これは一日中、草原に放しておいた羊の群を呼集めるために、牧童が吹く笛の音です。

この角笛の響には、佛蘭西の舊い物語が籠つてゐます。今日、アルプスの山中で、この羊飼の笛の音を夏の夕方耳にした人ならば、必ずその物語を思ひ出すでせう。そのお話は次のやうです。

「響には、佛蘭西の舊い物語が籠つてゐます」

昔々、今から千百年以上も昔のこゝです。今の佛蘭西と獨逸との兩國に互つて、その領土を占めてゐたシャルマアニユ大帝といふえらい王様が、ありました。その當時の歐羅巴は、一時全くこの王様の支配の下におかれたくらの勢でした。

このころが、その頃今の西班牙へは、アラビヤ人が地中海から侵入して、非常な勢でその土地を征服して、シャルマアニユ大帝に對しても、いつも謀叛を企ててゐました。シャルマアニユ大帝はそれを怒つて、是非一度、自らこのアラビヤ人を征伐に行かなければならないといふので、軍隊を引きつけて、ピレネー山といふ高い山を越えて、西班牙の地へはひりました。そして、そのアラビヤ人等を征服して、いよく佛

シャルマアニユ フランク王國の王。ベビンの子。父王の歿後大いに其の國勢を振張す。西紀八一四年歿す。齡不明。Charlemagne.

アラビヤ人 アラビヤの北に興り、アフリカの北岸を西進して今の西班牙の地に到りしサラセン人のこと。

ピレネー山 佛蘭西と西班牙との國境に聳ゆる大山脈。Pyrenees.



(嶺連スブルア)

雪の古千

蘭西の方へ引上げて來るこゝになつたのです。

さて、シャルマアニユ大帝は、隊伍を整へて、しづく／＼とピレネー山を越えて佛蘭西の空の方へ向かつて歸つて來ました。幾月もの戦のために、人々は早く故郷の空が仰ぎたく思ひ、故郷の山河を望みたく思ひ、そしてその美しい佛蘭西の土地から産する紫の葡萄の味を思つて、胸ををぞらせながら勇んで山を登つて來ました。

けれども、その時、シャルマアニユ大帝一人だけは、何となく沈んだやうな顔色をして、部下の者どもがはしやいでゐるにも關らず、黙つて、さかく浮立たない様子をしてゐました。それは、いつも自分の傍を離れずにあつた自分の甥のロオランと云ふ英雄が、傍にゐなかつたためでした。

「紫の葡萄の味を思つて」

ロオラン Roland.

ロオランはその時、何處にゐたでせうか。この英雄は、大帝の軍隊が西班牙を引上げる時、その軍隊の殿をして、最後から敵のおさへこなつて來るのでした。ごいふのは、アラビヤ人は、シャルマアニュ大帝と和睦の約束を結んだけれど、いつその約束を破つて謀叛を起さないとも限らないから、それがため、一軍の中で最もすぐれた勇者のロオランが最後に残つて、その様子を見て引上げるこゝになつてゐたのです。そして、若しアラビヤ人が叛いて背後からロオランに襲ひかゝつたならば、その急を告げるために、最後の手段として角笛を吹くこゝになつてゐました。それで、若しその角笛の響が聞えたならば、シャルマアニュ大帝の軍は、すぐ引返してロオランを助けるこゝになつて居たのです。

「殿をして」

もう大帝の部下は喜に小踊して山路を登りつめ、そろそろ下り坂の方へ向かつてゐました。佛蘭西の空が彼等の目の前に輝きだし、美しい佛蘭西の平野が彼等の脚の下に廣りました。彼等は跳り上がつて萬歳を叫びました。けれども、大帝一人は、やはり黙つて、沈んだ顔付をしてゐました。そして今、彼の部下が叫んだ萬歳の聲がまだ消えてしまはない中に、大帝は遙か後方で、角笛の響がしたやうに思つたのです。彼は不意に馬をこゞめて、ぢつと耳を澄ましました。彼はまた、確にその角笛の音を聞いたやうに思ひました。そこで彼は部下を顧みて、今、角笛が響いたではないか、ロオランの角笛が、と云ひました。

「やはり黙つて」

部下の者も亦、ちよつと立止つて耳を澄ましましたけれ

ども、その時は、たゞ谿を走る水の音、林の中の風の響しか聞えませんが、皆の者は大帝に、それは風か水の音でせう。」と云ひました。軍隊はまた大帝を包んで、下り坂をおり始めました。しかし、シャルマアニユ大帝は、甥のロオランのことが何分にも氣にかゝつてなりません。部下の軍隊が悦び騒ぐ中に只一人、黙々として馬を進めてゐました。

「する、今度は、確にはつきり、ぼおう、ぼおう。」と云ふ角笛の響が、人馬の騒の中に聞えて來ました。シャルマアニユ大帝は、そら。」と云つて馬の頭を立て直しました。今度こそは明かに皆の者の耳にも聞えました。部下の者も一時に足を返して、今來た路へ急ぎました。角笛の響は斷續して聞えて來ました。

「大帝を包んで」

「響は斷續して」

ロオランは、どうしたでせうか。彼は四五人の從者と共に、軍隊の最後からしづく、山路へかゝつて來たのでした。する、シャルマアニユ大帝が心配してゐた通り、それまで從順な風をしてゐたアラビヤ人等は、俄に大聲で叫び出し、大勢の人間が一時に武器をとつて、ロオランの背後から、どつと襲ひかゝりました。彼等が恐れてゐたのは、この英雄ロオランとその部下でした。今そのロオランが小人數の人人と軍の最後から山路へかゝるのを見るとき、この人々を打捕つてしまひさへすれば、シャルマアニユ大帝の大軍も、恐るゝに足らないと思つたのでせう。いちやくロオランの身邊に迫つて、八方から兵器で圍んで襲つて來るのでした。そして、口々に、ロオランよ、自分等の軍へ降れ、でなければ

「四五人の從者と共に」

「いちやく」
「八方から」

ばお前の命はないぞ。シャルマアニユの軍は、もはやお前を置いて遠く行つてしまつた。」と叫ぶのでした。

ロオランはその中に突つ立ち、八方を睨みつけ、「汚らはしい。誰が汝等に降参するものか。我が劍が一度鞘を脱すれば、汝等の頭は秋の木の葉のやうに拂ひ落されるぞ。」と大聲に叫び立てました。その勢でアラビヤ人は一時四方へ退きました。が、また多數を頼んで集つて來ました。従者たちは約束の角笛を吹立てようとしたが、ロオランはそれをこづめて吹かせません。そして彼等と共に敵に向かつて、數々の戰場に働いた名劍を抜放つて、獅子王のやうに荒れ狂ひました。アラビヤ人はその度毎に、大聲に叫びながら逃退しました。けれども、執念くもまた攻寄せて來ます。斬殺され踏殺

「八方を睨みつけ」

「とづめて吹かせません」

執念く

ひるむ

され、岩に打當てられて、彼の周圍にはアラビヤ人の死骸が山と重なりました。けれども、多勢を頼むアラビヤ人等は一向ひるまずに攻寄せます。或者は山路を上へ登つて大きな岩を動かして、ロオランを脅しつけて、「早く降参せよ。さもなければ、この岩を落して皆殺しにするぞ。」と云ひました。ロオランは嘲り笑つて、身を跳びのけたかと思ふと、その大岩は非常な響を立てて、却つてアラビヤ人等の中へ轉げ落ち、多數の者に怪我をさせました。

けれども、何分にも數知れぬ攻手のために、さすがのロオランも次第に疲れて來ました。部下の者も或は傷つき、或は死にました。もう如何にも仕方がないので、彼は自分で角笛を取上げて、息のかぎり、吹立てました。角笛の吹口は、ロオラ

コケマ
ンの口から出る血で赤く染まりました。二聲三聲……その響は山に、谿に、恐ろしい大牛の最期の叫のやうに、銜して鳴りわたりました。

それを見るに、アラビヤ人等は一せいに聲をあげて、八方からロオランを取捲いて肉薄して來ました。彼はもう必死の力で荒れ狂ひ、跳びまはり、人間業とは思はれぬ働をしました。彼の手勢の中で生残つたのは、いつも彼と共にシャルマアニユ大帝を助けて働いた親友一人きりとなりました。しかもその親友も遂に勇ましい最期を遂げてしまひました。さすがのロオランも、もはや自分の最期が來たと覺悟を決めました。それにしても、自分が今まで幾十回幾百回と戦つて勝つて來た愛劍を、むざ／＼と蠻人などの手には渡し

「大牛の最期の叫のやうに」

たかない、むしろ岩を切つて劍を折つてしまはうと、傍の大岩にはつしとばかり切りつけました。劍の先から火花がはつと散りました。その時、ロオランは、今まで自分が戦つて來た幾度かの勝利の姿がまざ／＼と火花の中に浮かび上がるのを見ました。

アラビヤ人はこれを見て一度に驅寄りました。

トキ
その時です、ロオランの閉ぢて行く目の前へ、シャルマアニユ大帝を先頭に六萬の大軍が逆落しに山を驅けおり、関の聲をあげながら、アラビヤ人の中へ殺到したのは、先刻ロオランが命の限り吹立てた角笛の響はまだ谷の底に銜して残つてゐました。けれども、大帝が木蔭に倒れてゐるロオランを見付けて急いで抱き起した時には、彼の魂はもはや

「まざ／＼と火花の中に」

「響はまだ谷の底に銜して」

その體を離れてゐました。
角笛の響の中には、今もなほ、この英雄の最期の恨が籠つてゐます。

夏の夕、アルプスの山中で、一度でもこの響を耳にした人は、勇ましい、然しながら悲しいこの物語を思ひ出さずには居られないでせう。

今日、佛蘭西の都巴里へ行つた人は、誰でも、シャルマアニエ大帝が馬に跨がり、その馬の右と左とに、ロオランと彼の親友とが立つてゐる勇ましい姿を、ノートルダムといふ大きな美しいお寺の前に見ることが出来ます。

(吉江喬松の文による)

「勇ましい、然しながら悲しい」

ノートルダム 巴里にある古寺院。Notre-Dame.

吉江喬松 文學者。明治十三年長野縣に生まる。早稻田大學の出身。現に同大學文學部教授たり。

二一七 兆

第一場

場面 海岸の小高い岡にある神社の玉垣の前、二基の高麗狗が左右に立つてゐる。右側の高麗狗の上に、海賊の頭が跨がつてゐる。手下の五人が玉垣の上に乗つかつたり、高麗狗の臺に腰かけたりしてゐる。

頭「ごうぢやらう。うまくこの島を逃出す工夫はないものかなあ。もう二十日にはなるぢやらう。ごうも少し退屈した。旨い酒の一杯も飲みたいものぢや。初は命拾ひをしたと思つて神妙にしてゐたが、かう長引いては、やり切れない。」
乙「島人たちは俺どもを普通の船頭ぢやと思つて、徳島の御

人物 海賊の頭とその手下五人甲・乙・丙・丁・戊。島の人多勢。時及び處 五六百年前の瀬戸内海の阿波に近き小島。

「もう二十日にはなるぢやらう」

御番處

番處まで送り届けてやると言つてゐる。」

甲「御役人の手に渡されたものなら、折角助つた命が臺なしぢや。」

丙「巧く船を盗むより外に、島を逃出す工夫はあるまい。」

丁「ぢやが、この島の漁船のやうな、小ほけなものでは、何にもならぬ。せめて三十石か五十石の船が來るとよいなあ。うまくこの濱へかゝれば、それを奪ひ取つてやるんぢやが。」

頭「さうぢや。たゞ逃げるだけなら、今だつて逃げられるのぢや。だが、四國の島ぢや。向地へ逃げたところで仕方がないものな。俺どもが海の上へ逃げるのには船がいる。海賊船になるやうな岩乗な船が、うまく船がかりしてくれると好いぢやがなあ。」

らマク

カウテン

三十コウ

「たゞ逃げるだけなら」

4コウ4

乙「おい。靜かに、靜かに。向から藤六とか藤兵衛とかいふ男がやつて來たぜ。」

海賊皆だまる。島人一人、大きい魚籠いしなごをかつぎながら出て來る。

高麗狗に乗つてゐる頭を見咎める。

島人「おい、おい。それに乗つちやいかん。おりろ、おりろ。」

頭、不承々々におりる。

島人「このお狗様に觸つてはいかんぞ。これは島の守神同様に大切なもんぢや。この近處へ集つてはいかん。あちらへ行つてくれ、あちらへ。」

海賊共、よし／＼。合點ぢや。」

島人「この島の世話になつてゐる間は、俺等の言ふことを聞いてくれねばいかん。此方衆は、船に乗ればごんな優れた船

ミトハル

「それに乗つちやいかん」

マシヨウ

「お狗様」マシヨウ

カウテン

コナラシユウ

頭衆か知らんが、ごにかく俺等に難船を助けられたのぢや、この島にゐる間は、おごなしくしてゐてくれ。この高麗狗は大切な守神ぢや。」

頭「それはまた、何故にぢや。」

島人「此方衆は他國者ぢやから、知らんのぢやな。昔この島に尊いお坊さんがお渡りになつたことがあるのぢや。その時に色々あらたかな功德をお示しになつたが、さていよいよ島を去るさいふ時、かう仰せられたのぢや。『さて、お前達には氣の毒ぢやが、この島は百年の後には海中へ消えてしまふ島ぢや。お前達には見えぬだらうが、それが地形の上にならん。』と表はれてゐる。』と仰せられた。島人等はそのお坊さんを深く信心してゐて、誰一人その言葉を疑ふ者もなく、

功德
イロイ

子孫のために歎き悲しんだのぢや。すると、その聖は島人の歎を哀に思召て、『それは天地の定る命數で、人間の力でどうすることも出来ぬが、そのために命をなくす人々が不便だから、それだけはわしが法力で救つてやらう。』さう仰せられて、急に二臺の高麗狗を彫つて下さつたのぢや。そして、仰せられるのには、『凡そ百年の後に、この高麗狗の兩眼に血が滲むことがある。その夜こそ、大暴風雨が起つて、この島の亡びる時ぢや。ぢやから、血が滲んだと見たら、遲滞なく島を離れよ。疑ふ者は命を失ふぞ。』と仰せられた。俺等はそれを子供の時からよく言聞かされてゐる。その大切な高麗狗といふのがこの高麗狗ぢや。」

海賊等は今更のやうに高麗狗をじろく／＼と見る。

聖
ひじり
チキキ

「大切な高麗狗」

頭なるほど、それは大切な高麗狗ぢやな。(兩眼を覗き込みながら) ぢやが、まだ大丈夫ぢやな。少し石が黒ずんでゐるが、この鹽梅では十年や二十年は大丈夫ぢや。

島人馬鹿なこ言はつしやい。俺等は何時そのお知らせがあるか、不斷から氣をつけてゐるのに。この前を通る時は、誰でも氣をつけてお狗様の眼を見ることになつてゐるのぢや。それでは皆の衆、以後はこの高麗狗をおろそかに思ひなさるな。

海賊共、よし、合點ぢや、合點ぢや。

島人去る。海賊どもなほ高麗狗の周圍にうろくしてゐる。

甲馬鹿々々しい。こんな恰好の悪い狗だか猪だか分らない高麗狗に、そんな功德なんかあるものか。

「十年や二十年は大丈夫ぢや」

「こんな恰好の悪い」

頭「いや、かういふ片田舎の島人達といふものは、えてして馬鹿なことを本氣にするものぢや。」

丁馬鹿々々しい。こんな岩乗な岩ばかりの島が消えてなくなる道理がない。お天道様が西から出れば知らないが。

乙「おい、ごうだい。ものは相談だが、おれは一工夫ついたぞ。」

甲・丁「何ぢや、何ぢや。」

乙「この高麗狗の眼に悪戯をしてやるんぢや。」

丁「悪戯つて、何ぢや。」

乙「知れたこと。この高麗狗の眼に血を塗つてやるんぢや。」

丁「なるほど。」

乙「さうすると、島人等が泡を食つて逃出すぢやらう。きつこ逃出すよ。みんな居なくなつてしまふぢやらう。」

「おれは一工夫ついたぞ」

イタワラ

甲「そのごさくさまぎれにつけこんで、此方も島を離れよう
ごいふんぢやな。」

乙「さうぢや。」

丁「そいつは巧い考ぢや。」

乙「ごうぢや、頭、巧い考ぢやらう。」

頭「巧く行かなくつても、退屈まぎらしには可からう。巧く行
つたらお慰みぢや。」

丁「よおし、俺が腕を突いて血を出してやる。」

乙「いや、いや、そんな痛いことは……彼處に先刻から犬こ
ろが遊んでゐる。あいつを殺して血を出してやらう。」

乙「舞臺の外に去る。」

甲「面白い。」

「巧く行つたらお慰み」

アア

丁「なるほど面白い。島へ来て初めて面白い氣がする。」
頭「巧く引懸つてくれると面白いがなあ。」

乙「犬ころの死骸を持つて来て、その犬の血を取つて、高麗狗の
兩眼に塗る。」

丁「それで可い、それで可い。」

甲「俺達は彼處の松林へ行つてゐて、そつこ此方の様子を見
てゐよう。」

六人連れだつて去る。舞臺暫く空虚。十五六の娘二人、籠を携へ
て通りかゝる。神社の方へ向かつて拜む。ふと高麗狗を見る。

娘の「あら、大變ぢや。血ぢや、血ぢや。」

娘の「嘘ぢやらう。血が着いてゐりや、大變ぢやぞ。」

娘の「嘘なもんか。此處へ来て見さつしやれ。」

「血ぢや、血ぢや」

ウウウ

ウウウ

娘の二近づいて見る「あゝ、ほんに血ぢや、血ぢや。これは大變ぢや。をぢさん、をぢさん、早く、早く。」

娘二人悲鳴を上げながら狂奔する。島人、二人三人五人六人と、次々に四方から走つて来る。なるほど血ぢや。「血ぢや、血ぢや。大變ぢや。」血ぢや、血ぢや。村中へ知らせろ。「鐘を打て。」大變ぢや。高麗狗の眼が赤いぞ。「島の最後が来たぞ。早う島中へ知らせろ。島人たち口々に絶叫しながら、右往左往する。全島騒然として、一時に混亂する。」

第二場

場面 前場と同じ。同日の午後、島は再び静寂に返つてゐる。以前の高麗狗の前に、海賊どもは毛氈を敷き、家具財寶類を積重ね、銘々に美服をまとい、酒樽を置列べ、酒宴を開いてゐる。乙、藁

オコウヤ

ウオウヤ

サカ

に差した錢を持つて出て来る。

乙「まだこんな物が残つてゐた。ゆつくり捜せば、金目な物がまだ澤山あるぢやらう。」

丁「もう島人達は一人もゐないか。」

乙「もうゐない。最後の船も半里ばかりは漕出してゐるぢやらう。」

戊「これでやつと一安心ぢや。」

頭「さうぢや。久しぶりに旨い酒が飲める。なか／＼好い味ぢや。錢はすつかりで幾らある。」

甲「五百貫文位はあるぢやらう。」

乙「船も出来かゝつた船が、船造場に残つてゐる。あれを今夜中に何とか仕立てて逃出すのぢや。明日の朝になると、島人

「金目な物がまだ澤山あるぢやらう」

等があわてて歸つて來るぢやらうから。」

頭「あは、あは、馬鹿な奴等ぢや。巧く一杯喰はされて、あのをわてやうは何さいふ事ぢや。」

甲「明朝、島が残つてゐるのを見たら、ごんな顔をするぢやらう。」

海賊共「あは、、、、、、。」

頭「馬鹿な阿呆ぞろひぢや。」

海賊共「あは、、、、、、。」

とたんに、さつと吹起る一陣の風、激しく砂をとばす。

乙「何だ、ひどい風ぢやなあ。」

二陣三陣、ごうくと吹募る。

甲「急に吹出しやがつた。」

「馬鹿な奴等ぢや」

「ひどい風ぢやなあ」

丁（空を見上げる）「何時の間にか空が眞黒になつてゐる。」

ぼつりくと大粒の雨が降つて來る。

戊「雨だ。しけるのぢやなあ。」

頭（ふと不安になる）「島が消えて失くなる時は、大暴風雨が起ると言つたなあ。」

皆、不安らしい顔を見合はせる。

乙「頭、何を下らないことを言ふのぢや。俺が高麗狗の眼に血を塗つたのぢやぜ。」

恐ろしき雷鳴。風雨、勢を増す。皆恐れをのゝく。

頭「おい、眼を洗へ、高麗狗の。」

丁「合點ぢや。」

丁は御手洗の水を手拭につけ、高麗狗の眼を洗ふ。血は少しも

「しけるのぢやなあ」

「眼を洗へ」

落ちず、却つて眼の中から流れ出すやうだ。

丁「や、落ちるどころか、眞赤な血が後から後から流れ出して来る。」

頭「えつ。」

乙「そんな馬鹿なところがあるものか。」

乙も高麗狗に近づき、懸命に眼を洗ふ。甲・丙・戊皆これにならふ。風雨雷鳴のうちに、海賊どもは狂氣の如く眼を洗ふ。血は少しも落ちぬ。風雨益々募り、電光雷鳴は愈々激しい。

乙「あゝ、いけない、消えない。」

甲「どうしても消えない。」

乙「こんな筈はない。あゝ、いけない。」

丁「何だか、島が少しづつ下がつて行くやうぢや。」

「後から後からと流れ出して来る。」

「あゝ、いけない。」

頭ふと後を見る。「あゝ、駄目ぢや。見ろ、潮があんな處に來た。あ

の岩があんなに沈んでゐる。」

丁「あゝ、あすこの岩はもう半分沈んだ。」

乙「あゝ、駄目ぢや。潮ぢや、潮ぢや。」

頭「あゝ、もう駄目ぢや。困つた。ほんとうぢや。島人の言つたこ

ごはほんとうぢや。」

六人、右往左往して遁れようとする。雷鳴・風雨の音の中に、奔流の如く押寄せて來る海潮の物凄い音。その中に斷續する人間の悲鳴。天地晦冥の中に高麗狗の眼だけが赤く爛々と輝いてゐる。

——(幕)——

(菊池 寛の文による)

「潮が」

二二 勅語

昭和元年十二月二十八日午前十時三十分踐祚後朝見ノ儀ニ於テ賜リタル勅語

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ頼リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カラシムコトヲ庶幾フ
惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ内文教ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ迺チ志ヲ繼明ニ尙クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ

一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢業トシテ負荷ノ重キニ任ヘサランコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ
今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ
夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會

通ノ運ニ乗シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟
 レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセン
 コト是レ朕カ軫念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考ノ遺訓
 ヲ明徴ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ實ニ此
 ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ皇祖考暨ヒ皇考ニ效セシ所
 ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事ヲ獎順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無
 窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

切取線

釋語

- 一 自學自習の精神に基き本文中の語句の解釋を列擧したものである。一語意の轉用に就いては、更に辭書を調べる習慣を養ひたい。
- 一 辭書使用訓練の目的を以て、常に次の要件を見落さぬやうに注意せよ。
- イ 訓方。
- ロ 文法上の品詞の性質。
- ハ 同意語・同音語・對照語・熟語。

一 槌の響

二 燈火

【浮腫】ムクミ。水腫(スキキ)などに
 て脹れ腫れること。
 【うけひごと】盟ひのことば。

三 父の思ひ出

【しぼ】革などにある皺。
 【統】ヌメ。光澤に富みて表面の極め
 て滑らかに、書畫を揮毫するに用ひ
 らる絹。

四 先生への通信

五 小諸なる古城のほとり

【遊子】イウシ。たびと。旅客。

【いざよふ】滯りて進まざること。た
 だよふ。たちやすらふ。

【草枕】クサマクラ。野山の草の上に
 臥す意。轉じて旅寐の風情にいふ語。

六 松下村塾を訪ふ

【俳味】ハイミ。俳句の趣味。

【回天の大業】君主の心を挽回するこ
 とより轉じて、國勢を挽回する大業。

【折衝】セツショウ。敵の衝き来るをく
 じくこと。又、敵と對抗してひげを
 取らざること。

【とよさかのぼる】豊榮登る。朝日な
 どの盛んに映えてのぼるにいふ。

七 繪馬の名畫

【繪難坊】エナンバウ。繪畫を見て、
 その缺點を指摘、非難する人。
 【悚然】ショウゼン。おそれて、ぞつ
 とする貌。

八 川柳點

【諷刺】フウシ。それとなく其の事を
 さとすこと。皮肉。

【突梯】トツテイ。滑稽に同じ。

【鄙俚】ヒリ。下品にして卑しきこと。

【高割】タカワリ。石高によりて、自
 己の分前を定むること。

【なづむ】とよこぼる。しぶる。

九 障子の國

【摩天樓】マテンロウ。天を摩する如
 く高き建築。

【風雅】フウガ。みやびやかなること。

風流。

【皮相的】ヒサウテキ。ものの表面だ
 けを見て、直ちに、それを判断する
 こと。

一〇 鎮守の森

【燦く】 トク。とかすこと。燦 音シヤク。
 【殿角】 デンカク。御殿の屋根のかど。
 【花信】 クワシン。開花のしらせ。花のたより。
 【葛蘿】 ツタカヅラ。葛と蘿と。蘿は葛と同じものをいふ。
 【瑞籬】 ミツガキ。神社の周圍に設けたる垣の稱。其の外構に設けたるを玉垣とす。
 【婆娑】 バサ。舞ふ貌。ひるがへる貌。
 【翩翩】 ヘンハン。又、ヘンボン。ひるがへりとぶ貌。
 【氏族】 シゾク。氏を同じくする人々。一つ氏の人々。
 【部民】 ブミン。上古諸豪族の擁せし私民。大化の新政に廢せらる。
 【高知り】 タカシリ。高く立派にして。窟屋 クツヤク。いはやのこと。こ
 こにては神の住みますところの意。
 【草萊】 サウライ。雜草のこと。萊はおひしげれる雜草。

一一 四季の雨

【晦】 ツゴモリ。陰曆にて、一箇月の末の日。

【枯生】 カレフ。草の枯れたる後より再び生ずるもの稱。
 【かこつ】 泣言をいふ。なげきいふ。
 【すたく】 集る。群る。
 【玉水】 あまだれに同じ。軒滴。
 【庭潦】 ニハタヅミ。雨の降りて地上に溜りて流るゝもの。
 【繰言】 クリゴト。同じことを繰返しにいふこと。
 【かたみ】 たがひに、相共に。
 【ふつゝか】 大きく、ぶこつにして、卑しげなること。
 【外山】 トヤマ。端なる山。はやま。奥山に對していふ。
 【龍膽】 リンダウ。龍膽科に屬する多年生の草。高さ一二尺に至り、葉は厚くしてやゝ竹の葉に似たり。秋、紫色の花をつく。
 【つきくし】 似合はし。似つかはし。
 【おどろくし】 おどろくべきさまなること。仰山なること。すこきこと。

一二 椿落ちて(句評)

【よべ】 ゆふべ。昨日の夜。
 【月並】 ツキナミ。真心を現したるに非ずして、文學的價值に乏しき俳句

【彫琢】 テウタク。ほりみがくこと。手を加へて立派に仕上ぐること。
 【推敲】 スキカウ。詩句を彫琢すること。
 【妙諦】 メウテイ。おもしろさ。
 一三 露の世
 【うきふし】 憂き節。つらきこと。
 【とみに】 俄に。早速に。
 【執念】 シフネン。深く思ひこみて心の移らざること。執心。
 【連夜】 タイヤ。忌日の前夜。
 【持佛堂】 チブツダウ。我が念ずる佛を安置せる堂。佛間。
 【殊勝】 シュショウ。殊に勝れたること。神妙なること。感心なること。
 【振分髪】 フリワケガミ。童の髪を左右に振分けて垂れたるもの。
 【日すがら】 日中。ひねもす。ひもすがら。
 【牡鹿の角の束】 ラジカのツノのツカ。「牡鹿の角」は束にかゝる枕言葉。語の意は束の間といふに同じ。ちよつとの間。
 【みどりご】 綠兒。四五歳までの小兒。

【痘の神】 モガサのカミ。疱瘡神。
 【水腫】 スキノウ。うすきうみ。水うみ。
 【かせぐち】 「かせ」は瘡蓋などの乾きたること。「ぐち」はさうならんとしつゝあること。
 【きづな】 絆。つながりて離れがたき情。

一四 雪前雪後

【耀ふ】 カマヨふ。かゞやく。きらめく。
 【天華】 テンクワ。天上に咲けりといふ花。
 【蘆絮】 ロジヨ。蘆の花。絮はふるわた。又、綿の如き花。
 【野渡】 ヤト。田舎の渡場。
 【仙境】 センキヤウ。仙人の居る處。仙郷。
 【縹渺】 ヘウベウ。はるかかにひろき貌。
 【半衢】 ハンク。衢はみち。半は軽く添へたる語。強いていへば、片側路。
 【瓊瑤】 ケイエウ。共に美しき玉。
 【塵樓】 シンロウ。塵氣樓といふに同じ。

【巍峨】 ギガ。山の高く大なる貌。又物の高く聳えて大なる貌。
 【鷺鷥】 ロゼイ。鷺は鳥の腹部などにある柔かき毛。鷺の柔毛。
 【渣滓】 サン。かす。をり。沈澱物。
 【はゆく】 まばゆきこと。
 【藍靛】 ランデン。藍色。靛は藍にて染めたる色。
 【敗荷】 ハイカ。枯れたる蓮。

一五 樹の根

【金剛不壞】 コンガウフエ。極めて堅固にして破壊せぬこと。

一六 日蓮上人

【無間地獄】 ムゲンヂゴク。八大地獄の一。間斷なく責苦を受くるところ。
 【天魔】 テンマ。正しき佛法に害をなす魔王。名を波旬(ハジュン)といふ。
 【要撃】 エウゲキ。まちぶせして撃つこと。
 【折伏】 シヤクブク。佛教に於て、その教義を擴めるために、他を攻撃して破折屈伏せしむること。
 【歸依】 キエ。信仰して佛に依頼する

【唱題】 シヤウダイ。題目を唱ふること。
 【餘澤】 ヨタク。後世にまで残れるめぐみ。
 【辛辣】 シンラツ。きはめてきびしきこと。手ひどきこと。
 【激越】 ゲキエツ。音聲のはげしくあがること。
 【俠骨】 ケフコツ。男らしき氣前。
 【柔腸】 ジウチャウ。優しき心。

一七 神國

【頌辭】 ショウジ。功德の美をたゞへる辭。
 【昭乎】 セウコ。照りかゞやきてあかるき貌。
 【宣命】 センミヤウ。純粹の國語を以て、天皇の天命を宣布すること。またそのもの。
 【天資】 テンシ。生まれつき。資性。
 【庶政】 ショセイ。もろゝの政。
 【百揆】 ヒヤクキ。多くの法。
 【國命を革め】 國體を改むること。革命。
 【形而下】 ケイジカ。形にあらはれた

る物。物質。

【涵養】 カンヤウ。ひたしやしなふこと。學識・氣風を養成すること。

【洶涌】 キョウヨウ。波のわきたつ勢。ケンパン。あがりひるがへること。

【掀翻】

【乾德】 ケントク。天皇の德。

【振古】 シンコ。振は自の意。昔より。

【恢弘】 クワイコウ。ひろむること。

【六合】 リクガフ。東・西・南・北・上・下の六方。

【八紘】 ハククウ。八方の遠き地方。

【宇】 ウ。天地四方。轉じて國の四方のはて。

【字】

一八 誠の説

【妄】 バウ。うそ。でたらめ。いつはり。あやまり。

【瘁く】 カジク。毀るゝこと。

【筭にあふ】 物事の調子よく合ふこと。適合す。

【文る】 カザる。飾る。

一九 杜子春

【龍眼肉】 リユウガンニク。南洋に産

する果實の一。小なる圓形にして、外皮は堅く、茶褐色の皺あり、肉は味甘くして賞美せらる。

【たぶらかす】 だます。ばかす。

【神將】 武人の姿したる神。

【眷屬】 ケンゾク。配下のもの。手下。

【畜生道】 六道の一。死者が、生前の罪業によりて、畜生に生まれたる境。

二〇 角笛の響

【いちはやく】 せはしく。すみやかに。

【執念く】 シフネく。執念深く。

【ひるむ】 志のくだけて勢のゆるむこと。

二一 亡兆

【御番處】 ゴバンショ。番人の詰所。みはりどころ。

【功德】 クドク。佛經の語。功力。現在また未來を益する善き作業。

昭和五年 六月二十三日 印刷
昭和五年 六月二十六日 發行
昭和五年 十一月二十二日 訂正印刷
昭和五年 十一月二十五日 訂正發行

國文選 (全十册)
定價 自卷一 各 六拾六錢
自卷四 各 六拾六錢
自卷五 各 金六拾錢
至卷十



發行所

東京市神田區錦町一丁目
(振替東京四九九一番)

株式會社 明治書院
電話神田一四一四番

編者 垣内松三

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 株式會社 明治書院

取締役社長 鈴木友三郎

東京市神田區雉子町三十四番地

印刷者 綾部喜久二

